中學東洋史

文學士　荻野仲三郎編纂

東京　山海堂書店

中學東洋史

例言

一本書は、中學程度の教科用書に充てんが爲に、編纂せるを以て、專ら簡約を旨として記述せり。されば事實の增減取捨は、一に實際教授の任に當らるゝ諸君に待たざるべからず。

一本書の紀年は、專ら西洋紀元に依れり、これ決して彼我の輕重をなすにあらずして、西洋史との對照を便にせんが爲なり。若し我紀元と西紀とを對照せんと欲せば、西紀に六百六十年を加ふれば、即ち我紀元を

得べし。又書中往々西紀と、我紀元とを併記せるは、殊に重要なる時期にして、特に注意を要すればなり。

一歴史を講習するに方りて、地理の必要なるは言を竢たずして明なり。故に予は、別に東洋史沿革地圖を著して、本書の地名を明にし、以て史實と地理の連絡を期せり。

一本書を編纂するに方り、學友文學士矢野太郎氏に負ふ所多し、特に記して謝意を表す。

明治三十二年九月

編者識

中學東洋史目次

第一章　總論

第一節　東洋史の定義及範圍……一

第二節　地理……二

第三節　人種……六

第二章　太古及三代時代

第一節　太古の支那……九

第二節　夏殷の興亡……一一

第三節　周初の治亂……一三

第四節　春秋……一九
第五節　戰國……二六
第六節　三代の文化……三三
第三章　秦漢時代
第二節　秦の興亡……三八
第二節　西漢の初世……四三
第三節　武帝の事業……四八
第四節　西漢の末路……五三
第五節　東漢の初世……五七
第六節　外國との關係……五九

第七節　佛教の東漸……六四
第八節　東漢の末世……七二
第四章　列國分爭時代
第一節　三國の交爭……七六
第二節　兩晉及五胡……八〇
第三節　南北朝……九一
第五章　隋唐及五代時代
第一節　隋の興亡……九七
第二節　唐の初世……九九
第三節　唐初外國との關係……一〇一

第四節　唐の中世……一〇八
第五節　唐の末世……一一六
第六節　唐の制度……一二一
第七節　學藝及宗教……一二四
第八節　契丹の興起……一三〇
第九節　五代の興亡……一三二
第六章　兩宋時代
第一節　宋の初世……一四〇
第二節　宋神宗の政策……一四九
第三節　金遼の興廢……一五四

第四節　宋金の交渉……一五九
第五節　金宋の滅亡……一六六
第六節　宋代の文化……一七七
第七章　元時代
第一節　元初の外征……一八一
第二節　元代の治亂……一八五
第三節　元代の文化……一九二
第八章　明時代
第一節　明の初世……一九五
第二節　帖木兒大王の兼併……二〇一

第三節　明の中世……二〇六
第四節　明の末世……二一三
第五節　明代の文化……二一八
第九章　清時代
第一節　清の盛時……二二一
第二節　西人の東漸……二三二
第三節　清の近時……二四六
第四節　清代の文化……二六四

目次終

中學東洋史

文學士　荻野仲三郎編

第一章　總論

第一節　東洋史の定義及び其範圍

定義

東洋史とは世界歴史の一半にして、東方亞細亞に於て古來興亡せる諸國民の沿革事實を叙述する歴史を云ふ。

範圍

斯の如く東洋史は東方亞細亞に於ける古來の沿革を尋ぬるものなれば、支那を以て其中心點となし、南方亞

細亞及中央亞細亞の歴史事實にして事の支那に關聯するものは取りて其沿革を略述し、以て相互の關係を明にせざるべからず、北方亞細亞と西方亞細亞とに至りては、事多くは東方亞細亞との關係甚だ疎なるを以て、共に是を省略し、東洋史の範圍以外に置きて可なり。

第二節　地理

三大山脈

山脈　東方亞細亞は三大山脈によりて圍繞せらるゝ一帶の地にして、其三大山脈は世界の屋脊と稱せらるゝパミール高原に起り、西に走りて西方亞細亞に入るものを、興都克士（ヒンドクーシ）山脈といひ、東北に走りて支那と西比利亞を界するものを阿爾泰（アルタイ）山脈といひ、東南に走りて支那西藏と印度とを界するものを喜馬拉耶（ヒマラヤ）山脈と稱す。又喜馬拉耶山脈と殆ど並行して崑崙山及天山の二山脈あり、崑崙山脈又分れて二派となり、一派東南に赴き支那に入りて南嶺となり、其東せるもの支那に入り、更に分れて陰山北嶺となり、共に支那民族の興亡上至大の關係を有せり。

水域　東方亞細亞の水域は山脈の方向によりて定る。山脈圍繞の高地なる西藏は諸大河の此に發源するも

楊子江
江黃河
恒河印度河
シール河アム河

の多し。支那本部にありて千二百里の流域と、沿岸地方の豐饒なるを以て、古今諸民族の爭點となれる楊子江も、洪水汎濫の患を重ねて、しかも支那文明の發生地たる黃河の二大水流も、印度の東西兩境を限れる、有名なる恒河印度河も、共に其源を西藏に發せり。

其他中央亞細亞の二大河、シール河及アム河は、共に源を新疆の西邊に發せり。

主要諸國の區劃　亞細亞は世界の最大陸にして、人文夙に開け、數千年の久しきを經たれども、今に於て獨立國と稱すべきは、我日本の外支那朝鮮暹羅等に過ぎず

朝鮮
支那
印度

朝鮮は亞細亞大陸最東端に位する半島國にして、京畿、黃海、平安、咸鏡、江原、忠淸、全羅、慶尙の八道に分る。支那帝國は支那本部、滿州、蒙古、伊犂、青海、西藏に分ち、更らに支那本部を十八省（直隸、山東、山西、河南、陝西、甘肅、江蘇、安徽、浙江、江西、湖北、湖南、四川、貴州、福建、廣東、廣西、雲南）に、滿州を三省（盛京、吉林、黑龍江）に分てり。支那本部の南海に臨みて、後印度諸國あり、之を安南暹羅緬甸の三國に分つ。安南の北部東京と稱する地は、佛蘭西の屬地にして、安南は佛蘭西の保護國となり、緬甸は英國の保護國となれるを以て、眞の獨立國は僅に暹羅の一國を存するのみ。其他の地は多く英吉利の領土に屬し、分れて十

イラン高原

中央亞細亞

二直轄州となれり。印度の西イラン高原の地は、卑路芝斯坦、阿富汗斯坦、波斯の三國に分る。之れ古の波斯なり。中央亞細亞は一二小藩國を除くの外は、皆な露西亞領に屬せり。

第三節　人　種

二大人種

東洋史上に於て常に主動者の地位に立つ者は、所謂黄色人種にして、是を大別して二種となす。一を支那人種といひ一を西比利人種といふ。

支那人種　支那人種を分ちて三族となす。漢族、圖伯特族、印度支那族、是なり、漢族は東洋史上殊に重要なる人種にして、支那本部を占め、東方亞細亞の文明を致せり。圖伯特族は西藏に住し、氐羌、月氏、吐蕃、黨項等皆な此族に屬す。印度支那族は支那南部及東印度の住民にして苗猺等は皆な此族に屬せり。

西比利人種　西比利人種中主要なるものを通古斯、土耳古、日本の四族となす。通古斯族は現今滿州黑龍江附近に散在する住民にして、古の東胡、靺鞨、契丹、女眞等皆此族に屬し、今の清朝も此族より興りて支那統一の業を成せり。蒙古族は蒙古の住民にして、古の烏桓、鮮卑等

漢族

圖伯特族

印度支那族

通古斯族

蒙古族

土耳古族

白色人種

此族に屬し、又支那を統一して大業を成せる元朝も此族より興起せり。土耳古族は現今天山南路より中央亞細亞地方に住し、古玁鬻、玁狁、匈奴、柔然、突厥、回紇、等皆此族に屬す。日本族は朝鮮半島の南部より日本に及べる人種にして韓族是に屬せり。

白色人種即歐羅亞非利加人種は波斯の伊蘭族、印度の印度阿利安族の如き、時に東洋史上の事變に關係するものあれども、其與るところ割合に少しといふべし。

黃帝

第二章　太古及三代時代

第一節　太古の支那

三皇　支那の文化を創めたる漢族人種は大凡五千年前西方より來り、黃河の沿岸に繁殖して幾多の部落をなし諸大族割據して各君長を戴けり。傳說によれば太古の世に三皇あり、是を燧人氏、伏羲氏、神農氏となす、事遼遠にして得て稽ふべからず。三皇に次で五帝あり、其事蹟稍考ふべきものなきにあらず。

五帝　黃帝、顓頊、帝嚳、堯、舜、是を五帝と稱す。黃帝は有熊國（海南省開封府）より起り、炎帝及蚩尤等の君長を征して領土

顓頊
帝嚳
帝堯

帝舜

を開き、東は海より西は空洞（甘肅省肅州）に至り、南は楊子江より、北は釜山（直隸省宣化府）に至るの一大國を開き、以て統一の姿をなせり。黄帝の後に顓頊、帝嚳あり、以て帝堯に至る。帝堯は帝嚳の子なり。平陽（山西省平陽府）に都す。羲氏、和氏に命じて始て曆法を定めしめ、鯀をして洪水を治めしむ、九年を歴るも功を成さず。乃ち求めて舜を得、委ぬるに萬機を以てし、遂に帝位を讓れり。

帝舜禪を受けて位に即く。都を蒲坂（山西省蒲州府）に定め、鯀の子禹に命じて水土を治めしめ、九州（冀、青、揚、兗、徐、豫、荆、雍、梁）を定む。是に於て諸方割據の豪族命を奉じ、一歲毎に來朝して

廣虞の代

大禹

貢賦を修む、是を述職といふ。天子も亦五歲毎に四方を巡回して政治の得失を監す、是を巡狩といふ。五刑（墨、劓、剕、宮、大辟）を用ひ、九官（司空、司徒、秩宗、士、共工、納言、皇稷、虞、典樂）を定め、天下治る。帝堯は陶唐氏にして、帝舜は有虞氏なるを以て、併せて唐虞の代と稱す。舜の子商均不肖にして、諸侯服せず、禹代りて位に即く。

第二節　夏殷の興亡

夏の興亡　夏の始祖を大禹と稱す。堯舜の際大洪水あり。鯀是を治めて功なし、禹父に代りて川を決し道を通

じ九州の貢賦を定め、遂に舜の政を攝し、後諸侯に推されて天子となり、安邑（山西省解州）に都して國號を夏といへり。禹死して子啓位を嗣ぐ。王位の世襲是に於てか定まる。啓の孫相に至り、有窮の后羿に逐はる。羿亦其臣寒促に弑せらる。相の子少康舊臣を招き、促の徒を平げて國を復す。後十世にして桀に至り暴虐なり、國大に亂れ遂に商湯に亡さる。時に西紀前十八世紀の頃なり。

王位世襲

少康

桀

商王湯

殷の興亡　商王湯は帝舜の司徒契の後なり亳（河南省歸德府）に起り、伊尹に任し、四方を征して諸侯を服し、遂に夏桀を南巢（安徽省廬州府）に放ち、代りて天子となる。後數世を經て盤庚に至り、都を殷（河南省河南府）に遷し、國號を殷と改む。其後二世を經て、武丁に至り、傅說を擧げて相となし、殷室大に興れり。更に數世を經て、帝辛に至り號して紂と云ふ、暴戾なり、遂に周の武王に滅さる。時に西紀前一一二三年なり。

盤庚

紂

第三節　周初の治亂

周室の基業　周の祖先を姫棄といふ。唐虞の際に后稷となりて、邵（陝西省商州）に封ぜらる。古公亶父に至り獯鬻の寇を避けて、岐山（陝西省鳳翔府岐山縣）に移り、國を周と號す。其孫

文王

武王

鎬京

周公

文王昌殷王紂に仕へて、西伯に任ぜられ、大に仁政を施し民心之に歸し、都を豐（陝西省西安府）に定め、天下を三分して其二を有てり、文王死して其子、武王發立つに及び紂益無道なり。武王遂に西方の諸侯を率ゐて紂を伐ち、殷を亡して天下を一統し、鎬京（陝西省西安府後の長安是なり）に都す、是に於て大に宗族功臣を分封して諸侯となし、以て王室の藩屏となす。

成康の治　武王死して子成王誦立ちしも、歳尚幼なるを以て、周公旦、召公奭と力を協せて、之を輔佐し、萬機を攝行す。管叔蔡叔の亂を平げて、天下の太平を致し、禮樂

洛邑

五爵

制度を制定し、範を後世に垂る。初め武王鎬京を渭南に作りしが、成王は殷民を洛濱に遷して洛邑（河南省河南府後の洛陽）を作り、是を東都となし、鎬京を西都と云ふ。成王死して子康王釗立つ。時に周公已に死し、召公畢公高と共に之を相けたり。成康の際周室極盛にして國内安寧刑罰を用ゐざること四十餘年と稱す。

制度　周の制度は實に支那歴代制度典禮の根源なれば、之を略述し置くの必要あり。

封建の制　周公武王を相けて殷に克つや、封建の制を襲用し、諸侯の爵を分ちて公侯伯子男の五等となす。公

六官

侯の封地は方百里、之を大國と稱し、伯には七十里、之を中國と稱し、子男には方五十里を與へて小國といひ、五十里以下は附庸と稱し、之を諸侯に隷せり。當時天下を九州に分ち、中央の一州方千里を畫して之を王畿となし、其他を五服（甸侯綏要荒）に分てり。

官制　中央政府に天地春夏秋冬の六官を設け、其屬各六十あり。天官の長なる大冢宰は天下の政治を總理し、地官の長なる大司徒は敎化農商を掌り、春官の長なる大宗伯は祭祀禮樂を掌り、夏官の長なる大司馬は兵馬を掌り、秋官の長なる大司寇は刑辟を掌り、冬官の長なる大司空は百工の事を掌れり。其他三公（太師太傅太保）、三孤（少師少傅少保）は共に天子顧問の官にして直接國政に預らず、諸侯も亦之に準じて官制を設けたり。

三公孤

徹法

田制稅法　田制稅法は夏に貢法あり、殷に助法ありしが、周は此二法を通用して之を徹法と稱し、一井を九百畝とし、中百畝（一町七反餘）を公田となし、餘八家にて各百畝を受く。八家は共に公田を耕し、其所得を租稅とす、是を粟米の征と云ふ。又人民を役するを力役の征と云ひ、絹布を納めしむるを布縷の征と云へり。

兵制　兵士徵發の法は一甸（六十四井の地を云ふ）毎に戎馬四匹

宣王の中興

兵車一乘、甲士三人、步卒七十二人、雜兵二十五人を出し、一萬二千五百人を以て一軍とし、天子は六軍、大國は三軍、中國は二軍、小國は一軍を置くを例となせり。

周室の衰運　康王死して昭王瑕立つに至り、漸く衰へ四夷交寇す、王南巡して返らず。穆王滿嗣で立ち西の方犬戎を征し却て諸侯の心を失ふ。其後四世を經て厲王に至り暴虐なりしかば、國人王を逐ひて其子宣王を擁立す。當時周室頗る衰へ、四夷の來侵益盛なり。即ち尹吉甫に命して北玁狁を征せしめ、方叔に南荆蠻を、召穆公に東淮夷を平げしめ、遂に親ら徐戎を征す。是に於て一

申侯の反

時中興の業を全ふせしと雖も、其子幽王に至り褒姒を嬖し、申后及太子宜臼を廢す、申侯王を怨み、犬戎を誘ひ來りて王を驪山下（西安府臨潼縣）に殺す。鄭、晉、衞、秦の諸侯各師を帥ひて來援し、犬戎を擊退し、宜臼を迎へ立つ之を平王となす。王西都戎狄に逼るを以て東都に徙る、是を周の東遷と云ふ。時に西紀前七七〇年なり。

周室の東遷

第四節　春秋

春秋

春秋十二列國　春秋とは孔子の春秋に記載せる時代の稱にして、周の東遷以後凡二百年間の事以て此書に

徵すべし、故に稱して春秋の世といふ。始め周室の盛時にありては諸侯各其制を守りたりしも、周東遷の後春秋の世となり、王命衰へて併呑の風漸く行はれ、諸侯の大なる者僅に十二國、其周と同姓なるは魯、衞、晉、鄭、燕、曹、蔡の七國にして、其周と異姓なるは齊、宋、陳、楚、秦の五國なり。

戎狄の跋扈　周室の衰微と諸侯の紛爭に乘じ、戎狄益勢を逞して、深く內地に侵入せり。其著名なる者は今の陝西地方に犬戎驪戎白狄あり、山西地方に赤狄北狄あり、直隸の地方に山戎鮮虞あり、河南の地方に陸渾茅戎あり、山東地方に長狄あり、江蘇地方に淮夷ありて、各跋扈し楚は荆蠻の間に起りて漸く北侵せんとし中原將に戎狄の蹂躪する所とならんとせり。

五覇　是に於て諸侯の有力なる者出でゝ尊王攘夷を唱へ、天下の諸侯を糾合して、以て內難を靖め、外患を攘はんとし、世に謂ゆる五覇の業起る、五覇とは齊の桓公宋の襄公、晉の文公、秦の繆公、楚の莊王の五人にして覇は伯諸侯の長たるを云ふなり。

齊の桓公慨然として先づ起り、中國諸侯を鄄（山東省曹州府にあり）に會して始めて覇業を成し、山戎を退けて燕を救ひ、北

狄を攘ひて衞を存し、又南の方楚を伐ちて周に朝貢せざるを責め遂に諸侯を九合し、天下を一匡す、中原の民戎狄の慘禍を免れしは、桓公の功と謂はざるべからず、後ち桓公死して內亂相繼ぎ、覇業遂に衰ふ。

宋の襄公

宋の襄公は桓公と親交ありしを以つて、桓公の遺托を受けて、齊の孝公を擁立して、一時覇を稱せしも、楚と泓（河南省にある水名）に戰ひて敗死するに及び、楚勢を得て益中原を侵す。

晉の文公

晉の文公起り諸侯に覇として、中國の危きを持せり。

周の襄王赤狄に逐れて、鄭に走り、難を諸侯に告ぐ。文公

秦の穆公

楚の莊王

先づ勤王の師を起し、狄を攘ひて、王を復し、又諸侯を帥ひて、楚を城濮（山東省曹州府）に破り、諸侯を踐土（河南省開封府）に會して、勤王の盟をなす、是より晉中國に覇たる事百餘年に及べり。是時に方り、秦の穆公晉の文公と相對して、雄を西方に稱せり。文公死して穆公晉と隙を生じ、崤に戰ひて敗れしが、是より秦晉兵を構ること七十年に及べり。穆公能く賢良を用ひ、百里奚、蹇叔、由余の徒を擧げて國政を修め、國を併す二十、遂に西戎に覇たり。

秦の穆公の後八年にして楚に莊王起れり。莊王庸（湖北鄖陽府）を滅し百濮陸渾を伐ち、遂に洛水に至り、兵を周の境

闔廬
夫差
勾踐

に觀し、鼎の輕重を問ふ、蓋し周室を圖るに意ありしなり、次で陳を平げ、鄭に克ち、遂に晉軍を邲（河南省開封府）に破りて、威を江南に振へり。

吳越の興亡　楚の莊王の死後七年にして吳に壽夢（ジム）出づ、後七十年にして闔廬あり、楚の亡臣伍子胥を任用し、大に楚を破りて都城郢（湖北省荊州府）を陷る。已にして楚は秦の救を得て僅に存せしも、又前日の勢なく、吳代りて江淮の間に雄視せり、後ち越を伐ちて、遂に敗死す。其子夫差繼き、大に越を夫椒に敗り、勾踐を會稽山に圍みしも、伍子胥の諫を用ひずして、之と和せり。勾踐乃ち范蠡を

用ゐて、恢復の謀をなし、遂に吳を襲ふて、之を滅し、中國に入りて、貢を周の元王に致して伯となり、諸侯に覇たり。勾踐死して吳復振はず、遂に楚に合はさる。

王室の式微　周は東遷以來復天子の實權なかりしと雖も、五覇迭立の時代に於ては、仍尊王の大義を唱へし者あり。然れど春秋の末期に及びては、大臣政を爭ひ、王族相害ひ、周室日に衰微して、諸侯復之を尊ぶ者なく、皆な天下を一統して以て周に代らんとするに至れり。

陪臣の强盛　王室上に衰へ、諸侯互に呑噬を事とするのみならず、諸侯の權臣亦專横にして、主家を簒奪せる

田齊
三晉
戰國

もの少なからず。即齊に田氏ありて其國を纂ふ、所謂田齊なり。晉に韓魏趙の三氏ありて遂に其地を分領す、三晉是なり。

第五節　戰國

戰國七雄　戰國とは春秋以後秦の一統（西紀前二一二年）に至る二百六十年間をいふ。是時に方り春秋の初世に於ける列國多くは滅亡して、僅に秦楚燕の三國を存するのみ。是に新に獨立せる田齊、韓、魏、趙の四國を合せて、戰國七雄と稱し、宋、鄭、衞、魯の如き獨立の姿を失ひて、七國に

分屬し、僅に衞のみ始皇統一の時迨存せり。

七國の形勢　七雄割據の形勢を考ふるに、秦は咸陽（陝西省西安府）に都して、西方の地を占めて天下を爭はんとし、楚は郢（湖北省荆州府）に都して、南方一帶の地によりて上國を圖らむとす。田齊は臨淄（山東省青州府）に都して東方山海の要勝を占めて國富み兵强し、燕は薊（直隸省順天府）に都して、東北の地を有して中原を窺ひ、趙は邯鄲（直隸省廣平府）に都して、北方の地を領し韓は陽翟（河南省禹州）に都して、魏秦の間にあり。魏は安邑（山西省解州）に都して、中央の地を領す。かくて七國交爭ふて互に侵畧を事とせるも、中國諸侯は其力相

孝公

合從

蘇秦

對して能く統一の功を奏すのものなく、秦獨り優勢の地位を占めて、六國に抗するを得たり。

秦の勃興　秦は西方に僻在するを以て、諸侯皆な擯けて之を夷狄視し、會盟に與らしめず。秦孝公大に發憤し商鞅を用ゐて、富國强兵の術を講じて、强盛となり、將に山東諸國を壓倒せんとす。

合從連衡　是に於て諸侯其力を合すにあらずんば、殆んど秦に敵する能はず、即ち合從の說起る。從は縱なり、南北を云ふ、當時六國の位置南北に列す、故に六國の同盟を合從といふ。合從の說を唱へし者を蘇秦となす。先

張儀

連衡

づ燕の文公に趙と從親するの利なるを說き、更に趙に赴きて肅侯に見え、趙、燕韓、魏、齊、楚合從して共に秦に當るべきを說けり。肅侯悅び蘇秦をして更に他の諸國に說かしむ。遂に韓、魏、齊、楚に說きて從約をなし、六國の合從是に於てか成る。（西紀前三三年）　既にして秦齊、魏を欺きて趙を伐たしめしかば、蘇秦趙を去りて、合從全く破れたり。後ち數年を經て、楚、趙、韓、魏、燕、の五國又合從して秦を攻めしが、反て大敗す。明年秦大に韓趙を敗り、諸侯爲めに震恐す、時に張儀仕へて秦にあり、諸侯の恐怖せるに乘じ、諸侯に說くに連衡の利を於てす。衡は横なり、東西

樂毅

を横となす。當時秦は西方に國し、六國其東に在り、故に六國合せずして、各秦に連和するを連衡といふ。張儀先づ魏王に說きて、秦に服事せしめ、次で楚を欺きて、之を服し、更に韓、齊、趙、燕の四國に說きて、秦に事へしめ、六國の連衡全く成れり。（西紀前三一二年）時に合從破裂後二十三年なり。されど幾ならずして、張儀事を以て秦を去るに及びて、連衡も亦破れたり。

秦の一統　合從連衡共に破れてより、後殆んど百年間六國或は合し、或は離れ、互に交戰して、形勢定まらず。齊の湣王燕を破り、又宋を滅して、大に驕る、燕の昭王樂毅

田單

昭襄王

西周亡ぶ

をして楚と與に齊を攻めて七十餘城を降す。既にして燕王死して、樂毅燕を去るに及び、齊將田單遂に燕軍を破り、其侵地を復す。秦諸侯の攻爭に乘じ、連年兵を用ひて、山東の地を蠶食して止まざりしが、昭襄王立つに及び、范雎の計を以て遠交近攻の策を用ひて、諸侯を孤立せしめ將を遣はし交楚、韓、魏、趙、を伐たしむ。時に周は東西に分れ、赧王西周にあり。是に於て大に恐れ、命を列國に下して、秦を伐たんとせしかば、秦直に攻めて西周を滅す。時に西紀前二五六年（皇紀四〇五年）にして、周武王より是に至るまで三十七世八百六十七年なり、後七年にして

東周亡ぶ

政

秦亦東周を滅す。

秦莊襄王死して太子政立ちて王たり、歳僅に十三。而して秦攻伐已む時なく、山東の地益削らる、諸侯之を患ふ、秦王政の六年楚、趙、魏、韓、衞、合從して秦を伐ちしも、函谷に至りて敗走せり。次で秦は李斯の謀を以て反間を放ちて諸侯の君臣を離間し、然る後良將をして其後に隨はしめ。即位の十七年に韓を滅し、後二年にして趙を滅し、又三年にして魏を滅し、更に二年にして楚を滅し、其次年に燕を滅し、其翌年齊を滅して遂に天下を一統せり。時に西紀前二二一年にして、皇紀四四〇年なり。

祭祀

喪禮

第六節　三代の文化

喪祭　支那上世甚祭祀を重んじ、唐虞以來一定の制を生ぜり。王者壇を國都の南郊に築き、柴を燔きて天を祀り、其祖を配食せしむるを郊祀と云ひ、之に次ぐを社稷の祭とす。社は土神にして、稷は穀神なり、諸侯は社稷を立つるを得れども、郊祀を行ふを得ず。又王は九州の名山大川を祭り、諸侯は境内の山川を祭る。其他日月の蝕、水旱の災等には必ず祭るを例とす。人を葬るの禮甚厚く、周に至て其制大に備り、父母死すれば三年の喪に服する事、上天子より下庶民に至るまで異なることなし。

異姓を娶る

嫁娶　周人女を娶る必ず異姓よりす。是れ上古の遺俗にして、之に反するものは世以て失禮の大なるものとなせり。當時嫡妻の外多く妾あり、王及諸侯は皆な群妾を以て內官とし、王の內官凡三百餘人と稱す。

文書　支那文字の始めは三代以前にあり。傳へて黃帝の時蒼頡の發明にかゝるとなす。其形狀蝌蚪に類せるを以て蝌蚪文と名く。周の宣王の時太史籀大篆を爲り、秦の李斯之を增損して小篆を爲り、程邈次で隸書を爲れりと云ふ。上世未だ紙なく、或は木に書し、或は竹に書し、書籍の如きは大抵漆液を以て竹簡に書し、韋を以て

之を編めり。秦の始皇の時內史蒙恬始めて毛筆を製し、後漢の蔡倫始めて紙を作り、文書の用是に於て益便なり。

典籍　支那典籍の最も古きものにして世に存するを詩、書、易、周禮、儀禮となす、詩は周代の歌謠を集め、書は一に尙書と稱し三代の大政大事を記し、易は卦爻を列ねて吉凶を示し、周禮、儀禮は周の制度禮法を記せり。其他春秋、國語、戰國策等の諸書あり。

學制　三代共に國都に國學あり、鄉邑に鄉校あり。是れ大學小學なり。鄉學は夏に校と云ひ、殷に序と云ひ、周に

庠と云へり。周都の國學を辟雍と稱す、皆な禮、樂、射、御、書數を以て教科となし、之を六藝と稱す。

諸學派の興起　周代の文運彬々たりしと雖も、典禮繁碎虛儀虛文に流れしが、春秋戰國の頃よりして、思想言論の自由を得て、學者輩出し、各新說を唱導し、諸子諸家なるもの雜然として起れり。

儒家　儒家は魯人孔子（西紀前五五一年に生れ、同四七九年に死す、）を祖とす。其學孝悌を本とし、仁道を天下に行ふを要となし、修身齊家より治國平天下に及ぶ。孔子王室の式微を慨し、之を恢復するの志ありしも、當時に容れられず、即ち魯に歸り

孔子　**孟子**　**荀子**　**道家**　**老子**　**莊子**　**墨家**　**楊家**　**法家**

て典籍を整へ、春秋を删正し、道を後世に傳ふ。弟子三千人あり、孔子に次で子思孟子荀子等あり、皆な孔子を祖述し、各自說を交ゆる所あり。支那歷朝の治體專ら儒教に基けり。

孔子と殆んど時を同じくして楚に老子あり。其學仁義禮樂を排して、無爲自然を尙ぶ。老子の後に列子莊子ありて、各其道を祖述す。是を道家と稱す。其說流れて道教となり、佛法と共に俗間に行はる。儒道二家の外更に異說を唱ふるものあり。墨家は墨子を祖として兼愛を唱へ、楊家は楊子が墨子に反對して自愛の說を唱へ、法家

兵家
名家
縱横家

は申不害韓非を祖として專ら法術を說き、其他兵家は孫武、吳起を祖として兵を論じ、公孫龍の徒は詭辯を弄して名家の祖となり、蘇秦張儀權謀を說きて縱横家の名あり。支那人智の活動盡し是時を以て最となす。

第三章　秦漢時代

第一節　秦の興亡

中央集權と郡縣

始皇帝　秦王政六國を併せ、天下を一統して自ら始皇帝と號し、西紀前二二一年專ら中央集權の政治を施さんとし、先づ李斯の言を用ひ天下を擧げて郡縣の制を布けり。是

書を焚き儒を坑にす
匈奴

れ實に三代以來の大變革なりとなす。又官制を改革して帝威を尊嚴にし、天下の富豪を國都咸陽に集め、民間の兵器を收めて騷亂を防ぎ、盛に土木を起して阿房宮を造營し、屢各地を巡遊して、至る所に石を立て、秦德を頌し、勉めて天子の尊嚴なるを示して、民心を威壓せんと圖れり。

當時戰國時代の餘風を存し、天下の學者各自家の學說を主張して、頗る朝政を非議し、大に民心を惑はす、是に於て帝書を焚き、儒生を坑にせり。

始皇帝の外征　匈奴は當時蒙古地方に威を振ひし土

萬里長城

南越を征す

耳古人種にして、殷周の際に獯鬻又は玁狁と稱し、屢秦、趙、燕諸國の北邊を侵せしかば、兵を發して之を攘ひ、各北邊に長城を築きて之を防げり。是に於て帝蒙恬に命じ兵三十萬を率ひて之を伐たしめ、河南（北河の南鄂爾多斯の地を云）の地を收め、長城を增築し、臨洮（甘肅省鞏昌府岷州）より遼東に達す、延袤七百餘里、以て匈奴の入寇に備へ、號して萬里の長城といふ。

帝又南越（安南）を征して桂林、南海、象郡、の三郡を置き、謫民五十萬人を徙して南嶺を戍らしむ、是に於て秦の疆域西は臨洮より、東は朝鮮に至り、南は安南より、北は蒙古に至れり。

群雄蜂起

項籍

劉邦

章邯

秦の滅亡　始皇帝死し少子胡亥立ちて二世皇帝となるや、宦者趙高を信任し、政を失して紀綱大に紊る。是に於て叛亂四方に起り、遂に秦を滅す。即ち陳勝吳廣等は先つ兵を蘄（安徽省鳳陽府）に作し、項梁項籍等は兵を吳（江蘇省蘇州府）に起し、治に興して楚の懷王を擁立し、劉邦は沛（江蘇省徐州府）に起り、田儋は齊に起り、各、地を略し、競ふて王號を稱ふ。是に於て二世皇帝將軍章邯をして往て伐たしむ、章邯連に楚軍を敗り、魏齊の軍を伐ちて、田儋項梁等を殺し、遂に進みて鉅鹿（直隸省順德府）を圍みしが、項籍の爲めに敗れて降り、

秦亡ふ

西楚の覇王

項籍諸侯の上將軍となる。劉邦尋て懷王の命を以て武關（陝西省商州東）に入る。趙高誅を恐れて二世皇帝を弑し、二世の兄の子子嬰を立つ。劉邦の覇上に至るに及びて嬰出ゝて降る。秦帝を稱する十五年にして亡ぶ。（西紀前二〇六年）

漢楚の爭　初め楚の懷王諸將に約すらく、先つ關中に入る者は之に王たるべしと。劉邦已に關に入り、秦の苛法を除き、大に民心を得たり。項籍河北の地を定めて、關中に入るに及び、勢を賴み、陽に懷王を尊んで義帝と稱し、尋て自ら西楚の覇王となり、後遂に義帝を放弑し、檀に諸將を分封し、劉邦に與ふるに漢中を以てす。劉邦怒

りて之を攻めんとせしが、蕭何の諫を納れて國に就き、項籍を伐つの時機を俟てり。已にして田榮陳餘等共に兵を擧げて項籍に叛く、項籍自ら兵を帥ひて之を伐つ、劉邦乃ち義帝の喪を發して諸王の兵を募り、遂に項籍を垓下（安徽省鳳陽府）に圍む、籍圍を脫し烏江に至り自刎して死す。是に於て劉邦皇帝の位に即く、之を西漢の高祖となす。（西紀前二〇二年）

第二節　西漢の初世

高祖の諸政　高祖の位に即くや、博士叔孫通をして先

封建の制を復す

づ朝儀を制せしめて、大に朝廷の威嚴を保ち、尋で制度法律を定むるや、亦皆秦の舊制によりて、甚しき變革をなさず。高祖即位の翌年大に功臣を封ず。後ち其強大を恐れ竊に之が備をなす。諸功臣即ち安んぜず、楚王韓信先づ叛して、誅せられ、是より數年にして異姓の王或は廢せられ、或は誅せられ、唯長沙の吳氏のみ久しく存するを得たり、高祖深く秦の孤立して亡びたるに懲り、悉く子弟を分封して藩屏となせり。

匈奴

外國との關係　匈奴は秦を畏れて北に徙りたりしが、中國の亂に乘じ、復南侵して勢強大なり。漢初匈奴の單

冒頓單于

南海

于（單于は胡言天子の號なり）を冒頓（ボクトツ）といふ、勇武にして權謀あり。其父頭曼を殺して自立し、東は東胡を破り、西は月氏を退け、南は嘗て蒙恬に奪はれたる故地を復せり。是に於て高祖之を征して白登（山西省大同府東）に至り、敵の重圍に陷り、辛ふじて免れ還る、匈奴屢漢を侵すも、高祖爭はず、幣を厚ふし、且婚を通じて、專ら單于の甘心を買へり、高祖の後も其政策に遵じて、事を搆へず。匈奴益傲り、呂后、文帝、景帝の際北邊に寇せしも、漢は唯これが防備をなすのみ。

秦末南海郡の尉趙佗あり、桂林象郡を併せ、自立して南

越王と稱す。高祖天下を一統するに及び、人をして之に說かしめ、册して其故土に王とす。呂太后の時佗復自立して長沙を侵す。文帝即位するに及びて慰喻して、平ぐことを得たり。

齊王呂氏を平く

呂氏の亂　惠帝の時呂太后攝政となり、呂氏の一族を封じて王となし、劉氏の王害せらるゝもの多し。幾ならずして呂后死す。齊王襄劉氏の諸王と謀りて呂氏を誅滅して、文帝を迎立す。

賈誼

七國の亂　文帝の時諸王驕傲にして、窃に異圖を抱くものあり、賈誼頻に制を定め、地を割き、衆く諸侯を建て

鼂錯

七國の亂

封建の制を廢し郡縣の政行はる

ゝ、其力を分たん事を說く。文帝即ち齊を分て六國となし、襄王の諸弟を分封す、景帝立つに及びて、鼂錯の勸に從ひ、楚、趙、膠西三國の地を削る、尋で吳の二郡を削るに及び、吳王濞遂に反し、楚、趙、膠西、膠東、菑川、濟南の六國皆兵を起して之に應ず。これを吳楚七國の亂といふ。帝、周亞父に命じ、三十六將軍を率ひて之を征せしむ。亞父大に吳、楚の兵を破り、諸反悉く平ぐ。（西紀前一五四年）景帝七國の亂を平げてより、諸王侯を京師に留めて國に就き政をなさしめず。別に朝廷より吏を遣して治めしむ。故に王侯唯租稅に衣食して、盡く權勢を失ふ。是に於て封建の

稱ありと雖も、實は郡縣の政全國に行はれたり。

第三節　武帝の事業

武帝　武帝は景帝の子にして、西紀前一四〇年を以て即位し、同八七年に死せり、帝雄才大略の資を以て、當時國勢殷富の際に生れ、內文敎を興し、外諸國を征し、赫々たる偉功實に漢代の英主なり。

儒學の興隆　高祖文敎の端を開きしより、學術漸く興りしと雖も黃老申韓の學專ら行はれしが、武帝大に儒學を好み、悉く他の學派を排し、大學を建て、五經博士を

置き、儒敎を興し、以て學政の統一をなせり。是に於て董仲舒・孔安國・司馬遷・司馬相如等の學者輩出し、經術・文章始めて盛んなり。

外國の經略　匈奴は漢初以來常に邊境の大患となり、其領土東は朝鮮より、西は圖伯特に及び、天山南北兩路の諸國も之に服屬して、頗る强大なり。武帝之を一掃せんと欲し、軍臣單于を誘ふて之を擊んとせしも、謀洩れて單于益來寇す、帝即ち衞青を遣し、討て河南の地を略して朔方郡を置き、更に衞青・霍去病の二將をして、道を分ちて匈奴を擊たしめ、去病は狼居胥山に至りて還れ

單于遠く逃る

南越
閩越
東甌
東越

西南夷

朝鮮

り。單于遠く遁れて漠南王庭なきに至れり。武帝の匈奴を征する前後十三回、匈奴是より大に衰微す。

南方に國するもの當時南越（廣東省廣州）閩越（福建省福州）東甌（浙江省温州）の三國あり。東甌は閩越の攻むるところとなり、江淮の間に移り、次で閩越に内亂ありて、東越新に其地に興れり。南越反するに及び、帝南越を討滅し、尋で東越を滅して其民を江淮の間に移し、東南の地悉く平ぐ。

西南夷は今の四川・貴州・雲南の地に據り、夜郎・滇（ヒン）・邛都・筰都・冉駹等大なりしが、帝又征服して皆郡となせり。

朝鮮は周の初め殷の箕子武王の爲めに封ぜられし國

西域諸國

にして、今の朝鮮の北境及盛京の東南境に當れり。世を傳ふること四十一世準に至り、漢の初め燕人・衞滿亡命して來り、遂に準を逐ふて、自ら朝鮮王となれり。孫右渠漢の邊吏を殺しゝかば、帝楊僕等を遣して之を討滅し、眞番（盛京省の東部）臨屯（江原道附近）樂浪（平安黄海二道）玄菟（咸鏡道）の四郡となせり。（西紀前一〇八年）

西域に通ず　西域とは匈奴の西に當れる大小數十國の總稱にして、殊に著名なるは葱嶺以外の大宛（浩罕地方）康居（キルギス荒原地）大月氏（ファラルの東南海）大夏（バクトリヤ）安息（パルチヤ）身毒（印度）等の諸大國となす。是等の諸國は夙に希臘羅馬の文

張騫西域に使す

化を傳へたりしかば。此等諸國との交通に依りて、自然に其文化を漢土に輸入せしは、大に注意すべき事なりとす。武帝張騫を大月氏に遣して、之と結びて匈奴を討たんとせしも、大月氏は戰を好まざりしかば、遂に要領を得ずして歸りしも、帝は西域諸國の狀を聞きて、更に張騫をして身毒に至らしめんとせしが能はずして、滇に通じ、後ち匈奴北に遁れて路通ずるに及び西は安息に通じ、南は身毒に至り、西域との交通始めて開け、帝屢西域諸國を巡狩せり。

第四節　西漢の末路

霍光の輔政　武帝死して昭帝猶幼なり。霍光遺詔を受けて之を輔佐し、專ら民力の休養を事として、對外の縮少策を執りしも、樓蘭の新王を擁立して國名を鄯善と改め、又烏桓屢寇せしを以て、伐て大に之を破れり。

宣帝の中興　霍氏の一族政を擅にすること二十餘年なりしが、霍光死するに及び叛を謀りて誅滅せられ、宣帝始めて政を親らし、勵精治を爲し、多く良吏を得て、中興の業を致せり。

匈奴の衰微　宣帝の初年匈奴連に烏孫を擊ちしかば、

匈奴の內訌

呼韓邪郅支

呼韓邪漢に降る

帝援兵を烏孫に遣し大に之を破る是より匈奴の勢日に衰へ、丁零は北より、烏桓は東方より、烏孫は西方より、各之を攻むるありて、諸の屬國皆瓦解し、加ふるに內訌漸く繁く、日逐王先賢撣（シン）は單于屠耆堂と隙を生じて漢に降り、屠耆堂又人の爲めに殺され、五單于爭ひ立ち、遂に分れて二となり、呼韓邪單于は郅（シツ）支單于と相攻め、戰敗れて漢に降り、郅支は康居に走りて一旦勢を得たりしが、西域都護甘延壽の爲に滅さる。（西紀前三六年）呼韓邪是に於て入朝し、且婚を請ふ、元帝乃ち宮女王昭君を以て之に妻す、是より匈奴世〻漢の甥と稱して、復邊に寇せず。

鄭吉

西域都護

玉氏の專權

王莽

西域諸國の服從　匈奴の衰微と共に漢威益西域諸國に及び、鄭吉車師を擊て其地に屯田し、馮奉世は莎車（回疆）葉爾羌（ヤルカンド）近傍を征し、趙充國は先零（青海地方）を平げて、金城の屬國を置けり。鄭吉遂に都護となりて、天山の南北三十六國を併せ鎭し、烏壘城に居れり。是を西域都護の始めとす。

王莽の簒奪　漢の威斯の如く外に振ひしも、元帝以後は宦官と外戚との專橫互に相軋轢して王室の否運を來し、遂に王莽の簒奪を致せり。王氏は元帝の時より漸く外戚の威を養ひ、莽は成帝の世に出でゝ大司馬となり、頗る英名あり、天下の衆望を收め、平帝を擁立し、次で

之を弑して孺子嬰を立て、三年にして又之を廢し、遂に自ら帝位に上りて國號を新と稱せり。西紀八年 然れども內は頻りに新政を出して、民望を失ひ、外は好を匈奴西域に失ひて、國威日々に衰へ、海內騷然として亂れ、民復漢を思ふに至れり。是に於て赤眉の兵は莒に起り、綠林の兵は荆州に起り、漢の宗室劉演劉秀の二人共に舂陵（湖北省襄陽府）に起りて之に應ず、諸將乃ち漢の宗室劉玄を立てゝ人望を維ぎ、兵を進めて昆陽（河南省南陽府）に王氏の大軍を破り、勢日々に熾にして、天下の豪傑幷び起ちて之に應じ、進んで長安に入り、王莽を斬る。莽帝と稱する事十五

年にして亡ぶ。

第五節　東漢の初世

光武皇帝　光武皇帝は劉秀と稱す。兄劉演劉玄の爲めに殺さる。秀難を避けて、河北、河內、燕、趙、の地を定めしが諸將の勸によりて、西紀二五年を以て、帝位に即き、鄗（直隸趙州柏鄉縣の北）に都し、尋で洛陽に都す。洛陽は長安の東に在るを以て、史に是を東漢と稱し、以て西漢に區別す。

此時赤眉の軍は長安に入りて劉玄を逐ひ、公孫述は蜀（四川省）に據り、隗囂は隴西（甘肅省）に據り、竇融は河西（甘肅省）に

光武の治世

に據り、各漢に服せず。帝鄧禹、馮異、馬援、吳漢、岑彭等の諸將を用ゐ、十餘年にして、悉く群雄を平げ、漢復天下を一統せり。是に於て、專ら漢の舊制に復し、勉めて外國との交渉を避け、武を偃せて意を內治に用ひ、大學を興して學術を奬勵し、又能く功臣を保全して太平を致せり。

明章兩帝の治　光武帝死して、明帝立つ、光武の遺制に遵ひ、學を尙び政に勤む。當時吏其人を得、民其業を樂み戶口蕃殖す、章帝嗣で立ち、政寬厚を尙び、刑を愼み徭を省けり、是に於て海內頗る無事なり。

匈奴の分裂

南單于內附す

第六節　外國との關係

匈奴の衰微　王莽漢室を奪ふに方り、頗る匈奴を冷遇す。匈奴怒りて屢北邊に寇せしが、後連年凶歲ありて人畜多く死亡し、烏桓其弊に乘じて之を破る。是より國力大に傾き、遂に分れて南北二國となり相攻擊して止まず。南單于先づ漢に內附す。光武之に西河山西省美稷鄂爾多斯の地を與ふ。既にして北單于も亦使を遣して和親を求めたりしが、明帝の時に至り、耿秉竇固に命じ南匈奴及烏桓の兵を率ひて之を攻め、伊吾盧甘肅鎭西府哈密の地を取る。西域諸國漢に隸屬してより、北匈奴衰耗し、南匈奴は

檀石槐

北匈奴遠く退く

竇憲

其南を攻め、丁零其北に寇し、鮮卑其東を擊ち西域は其西を侵して、殆んど自立すること能はざりしが、和帝の即位元年（西紀八九年）竇憲復大に之を擊破せしかば、遠く西方に却き去りて、北匈奴の地遂に空しく、鮮卑東より徙りて其地に據れり。

鮮卑　鮮卑は東胡の後にして烏桓と同種なり。初め冒頓單于の爲めに敗られ、西漢の代には鮮卑山（内蒙古の東部）を保ちし小部族なりしが、東漢の初より遼東に入りて漢に朝貢し、北匈奴の故地に徙り、匈奴の餘衆を併せて是に據るに及び漸く盛となり、桓帝の時檀石槐起りて大に四境を征服し、悉く匈奴の故地を奄有せしが。西晉の末に至りて更に大に興れり。

西域諸國

西域諸國　西域諸國は王莽の時叛きて匈奴に服屬せしが、光武帝天下を定むるに及びて、復都護を置かんことを請へり。然れども帝は外難を啓くを厭びて之を許さゞりしかば、莎車獨り勢を得て諸國を兼併せんとす。都善、車師等十八國再び都護を得んことを請ひしも成らず、是に於て復匈奴に降れり。

莎車

班超

明帝立ちて竇固等北匈奴を討つに及び、班超を遣して西域に使せしむ。超先つ都善に至り、匈奴の使者を斬り

西域再ひ漢に通ず

て其王を威服し、更に于寘（回疆和闐地）疏勒（回疆喀什噶爾）等を降し、かば、西域諸國再び漢に通じ漢は都護及び戊己の二校尉を置きて之を鎮撫せしむ。

章帝の時に至り、西域再び叛き、焉耆（回疆喀拉沙爾）龜茲の二國は漢の都護を攻殺し、北匈奴の兵亦來りて二校尉を攻めしかば、帝遂に班超を召還して西域の地を棄てんとせしが、班超疏勒に止り上書して兵を請ひ、月氏、莎車、龜茲等を平定し、遂に西域五十餘國裏海の濱に至るまで悉く漢に內屬し、班超都護となりて龜茲に居れり。

班超西域都護となる

是時に當りて羅馬帝國は頻に其領土を西方亞細亞に

甘英

任尙

西域を棄つ

擴め、漢人稱して大秦と云ふ。班超龜茲に在り部將甘英を遣りて大秦に至らしむ。甘英は安息を經て條支（テグリス）、（ユーフラテス）兩河畔に至りて還れり。

班超西域に在ること三十年老を以て請ふて國に歸り任尙代りて都護となりしが、撫御其方を得ずして邊和を失ひ諸國離反す。漢竟に西域を棄て都護を罷めたり。（西紀一〇七年、皇紀七六七年）

高句麗　高句麗の始祖を東明王朱蒙（スム）と稱す。扶餘種にして滿州の地より南下し、鴨綠江の水域に國を建てゝ高句麗といへり。（西紀前三七年）其地支那に接せしかば交涉最

も頻繁なり。王莽の時高句麗の瑠璃王漢に叛きて屢邊境に冠し、光武帝の時に及びて好を漢に通ぜしが、後幾もなくして高句麗王宮位に即き、濊貊の兵を率ひて漢と遼東玄菟の地を爭へり。

第七節　佛教の東漸

印度の上古　佛教の根源地なる印度は支那と共に世界史上の最古國の一にして、もとドラビド人の有なりしが、今より四千年前中央亞細亞よりアーリヤ人種の一部南下し來り、印度河を渡りてパンジャブの地を占

め遂に土民を征服して、ガンガ河水域の地に達せり。當時社會の部族は婆羅門（ブラーマン）、刹帝利（クシャトリヤ）、毘舍（ヴァイシャ）、首陀羅（シュードラ）の四階級に分れたり。婆羅門は僧族にして祭祀學藝を專業とし、刹帝利は文武の政事を掌るところの王族にして、嘗て社會の最高位を占めたる部族なりしが、婆羅門教の興るに及んで遂に僧族に壓倒せられて社會に第二位を占めざるべからざるに至りしなり。一般人民は毘舍族とて社會の第三位を占めて產業に從事せり。而して首陀羅はアーリヤ人の爲めに征服せられし土民にして屠殺の賤業に從事して四姓の最下に位せり。其制嚴に

して四姓各血統を保持して他と婚せざるを常とせり。當時四姓の階級に伴ひて、社會に存せし宗教を婆羅門教となす。其教は凡神教にして、一切萬有と神とを同一と見做し、萬有は神より分出して、又神に還歸すとなし、靈魂輪廻の說を唱へ人は專ら懺悔苦行によりて靈魂の解脫を求むべきを說けり。

佛教の起源　婆羅門教が全く上流社會の宗教となり、政教二權が僧侶の手に歸してより、百弊並起し衆民更に倚賴する處なきに至り、刹帝利種族に出でゝ宗教革新を全ふし、東洋史上に一大光彩を與へしものを、佛教

の開祖釋迦牟尼となす。

釋迦は其族名にして名を悉達（シダツタ）と稱せり、迦比羅城（カピラヴアスト）今のドゥ州中にあり（オウ）の城主淨飯王の長子にして西紀前六世紀に生る、夙に人生悲哀の觀念に動かされてありしが、年二十九歲にして宮中を脫して出家し、山に入て諸種の苦行を修し、年三十五歲にして解脫の法を大悟し、是より中印度の各地に布教する事四十餘年、平等無差別の主義を以て一切衆生を濟度し、徒弟數千を得たり。其目的は人生の轉迷開悟を以て大涅槃に到達するの道を示すにあり。然して實行の教義を以て專ら布教せしかば皆

摩揭陀國

阿育王

佛教の傳播

靡然として之に歸依するに至れり。後ち二百年にして佛教大に四方に傳播す。

阿育王の佛教　當時印度は數多の小國に分裂して、互に攻爭を事とせしが、中印度の摩揭陀國は難陀朝の治下にありて、最も强勢にして且つ多數の佛徒を有したりしが、西紀前三一五年チャンドラグプタ首陀羅族より起りて王位を奪ひ、大に疆土を開きて、威を印度に振へり。其孫阿育の立つに及びて、深く佛教に歸依し、或は經典を結集せしめ、或は法令を發して教法を告諭し、或は堂塔を建立し、或は宣教僧を國外に派遣せしかば、西

小乘教

は大夏より東は馬來半島に至り、南は錫蘭嶋に及ぶまて佛教の感化を蒙れり。

斯く佛教の興隆によりて、婆羅門教は一大打擊を受けたるも、全く衰滅に至らず、後ち大に再興の氣運に會して勢力を恢復せしと、回々教の傳來とによりて、印度及中央亞細亞の佛教は頗る衰へしも、錫蘭島に於て尙餘勢を保ち、是より緬甸暹羅瓜哇等に傳播して今日に至れり、當時の佛教は所謂小乘教にして、歐人の南派佛教と名くるもの即是なり。

迦膩色迦王の佛教　是より先き大月氏は益南進して

罽賓

カブールに至り、更に迦濕彌羅を占領して罽賓國を建てたり。東漢の初世に當りて迦膩色迦王立ち、深く佛教を信じ、阿育王の事業に倣ひ佛典の大結集をなし、其弘通を奬勵せしを以て、佛教は强大なる王國の國教として國王保護の下に繁榮し、王國の威勢と共に西域より支那に流傳するに至れり。

大乘教

佛教の東傳　迦膩色迦王の佛教は所謂大乘教にして歐人の北派佛教と名くるもの即是なり。其支那に密傳せしは西漢の時なれども、帝室の歸依に依り國内に流通せしは、東漢の明帝以後にありとす。帝佛に歸依せんことを欲し、蔡愔王導の二人を西域に遣して、佛法を求めしむ。愔等即ち罽賓に至り、佛經を得、且迦葉摩騰笠法蘭の二沙門を伴ひて還れり。西紀六八年帝即ち洛陽に白馬寺を建て、二沙門をして譯經に從事せしめたり。

蔡愔

白馬寺

當時罽賓は國運隆盛にして、教勢勃興の機に際し、馬鳴龍樹等の諸名僧輩出し、漢威西域に遍く西東の交通大に開けしかば、月支、安息、康居、龜茲等所謂西域地方の僧侶多く來りて布教譯經に從事し、東漢の天子も亦之に歸依する者多かりしを以て東漢の末年に至りて佛教大に發達し、魏晉より南北朝に至りて益隆盛に赴けり。

外戚の專權

宦官の跋扈

第八節　東漢の末世

外戚と宦官　西漢の天下は外戚と宦官との紛爭によりて疲弊せしが、東漢も亦外戚と宦官との爲めに滅亡するに至れり。抑東漢の諸帝は不幸にして早世せしを以て、母后常に幼主を擁して朝に臨み、政を外戚に委ねしかば、外戚自ら威福を專にせり。又宦官は光武以來常に君命の傳達を掌りしが、和帝以後母后朝に臨んでより、內外の事一に其手を經るを以て漸く勢を得るに至り。宦者鄭衆の和帝を助けて外戚竇氏を除き、孫程は外

黨人殺さる

戚閻氏を斥けて順帝を擁立し、單超は桓帝を助けて、外戚梁氏を斃せしより、權勢益重く、天下の大權悉く宦官に歸するに至れり。

黨人　黨人とは當時氣節を重んずる清流の士にして、力を合せて宦官の跋扈を制せんとせしより、宦官の爲に名けられし名稱なり。其の重なる者には竇武、陳蕃、李膺等あり。大學の諸生亦之に加はりて時事を論じ、朝政を誹議せしかば、宦官之を桓帝に誣告し黨人二百餘人を捕へて禁錮せり。（西紀一六六年）後ち靈帝の時に至り陳蕃、竇武、等朝に列し、勢に乘じて宦官を誅せんとこを謀りし

黄巾の賊

が、事洩れしかば宦官の誣ゆる處となり、黨人の殺さるゝ者百餘人、徙廢禁錮せらるゝもの六七百人に及べり。

東漢の滅亡　漢室の綱紀廢頽斯の如くにして、亂離漸く萌し、鉅鹿の張角先づ亂を作せり。是を黄巾の賊といふ。幾もなくして平げるも、是より所在に盜賊蜂起して、遂に群雄割據の世となれり。

袁紹宦官を誅除す

董卓

靈帝死して皇子辨立つ、袁紹諸將の兵を以て悉く宦官を誅除す。董卓京師に入り帝を廢して其弟獻帝を立つるに及び、袁紹走りて關東の諸將と兵を擧げて董卓を伐つ。董卓因て帝を擁して長安に遷りしが、呂布に殺さ

曹操

劉備

孫權

赤壁の戰

れ獻帝また洛陽に還れり。

曹操獻帝を奉じて許（河南省許州）にありしが、呂布、袁紹等を破りて、山東河南江淮の地を奄有し、更に烏桓を擊ちて大に之を破り、勢最も盛なり。是に於て兵を荆州に出して劉備に迫れり。劉備即ち夏口（湖北省武昌府）に走りて吳の孫權に援を求め、吳將周瑜と共に大に曹操を赤壁（湖北省武昌府嘉魚縣の東北）に破る。（西紀二八年）劉備即ち關羽を荆州に留めて、孫權曹操に備へしめ、自ら兵を率ひて漢中を略す。孫權曹操と約して關羽を攻殺せり。

董卓の亂後諸州の群雄相爭ふこと殆んど三十年、今や

漢亡ぶ

多くは滅亡して三國鼎立の形勢成る。

當時獻帝尚虛位にありしが、曹操死して子丕嗣ぐに及んで帝に迫りて位を禪らしむ。時に西紀二二〇年なり。

第四章　列國分爭時代

第一節　三國の交爭

魏の文帝

三國の鼎立　曹丕は位に即きて魏の文帝となり、洛陽に都して江北十二州の地を領し、劉備は其翌年を以て

蜀の昭烈帝

蜀の昭烈帝と稱し成都（四川省成都府）に都して梁益二州を領し、孫權は後ち八年にして

吳の大帝

吳の大祖大帝となり、建業（江蘇省江寧府）に都して江南四州の地を領せり。所謂三國の鼎立是なり。

蜀と吳

陸遜

三國の交戰　蜀の昭烈帝は關羽の讎を報ひんと欲して吳に侵入せしが、攻守累月にして、遂に吳將陸遜の爲めに夷陵（湖北省宜昌府）に破れて歸る。既にして吳の大祖好を蜀に通じ、吳蜀相連合して魏に當れり。

吳と魏

吳蜀の和成るに及び、吳魏の和忽ち破れ、魏の文帝は自ら大軍を發して、吳を征すること前後二回に及びしも、共に江水の漲溢に會ひ渡らずして空しく還れり。時に

蜀と魏

諸葛亮

蜀の昭烈帝既に死して後皇帝立ち、諸葛亮先帝の遺命

司馬懿

を奉じて之を輔け、魏の文帝死して明帝立つに及び、自ら諸軍を率ひて北伐し、祁山（甘粛省鞏昌府）を攻めて克たず、次で陳倉（陝西省鳳翔府）を圍みて糧食盡き、更に祁山を圍みて復糧食に窮せしかば、一旦兵を收めて國に還り、農を勸め、武を講じ、三年を經てまた北征し、吳と約して共に魏を侵せり。是に於て魏の明帝自ら出でゝ吳の軍を却け、司馬懿をして亮を禦がしむ、亮は懿と五丈原に相持すること百餘日にして、陣中に病歿したりしかば蜀軍引き還れり。

遼東

魏の東征　遼東の地は漢末の擾亂に際し、公孫度是を

公孫氏

併せ、西烏桓を破り、東高句麗を擊ち、勢漸く強し。子康は魏と好を通ぜしが、孫淵に至り自立して燕王となり、屢魏の邊境を侵せしかば、明帝は司馬懿に命じて之を討たしめ、遼東帶方（黃海京畿二道）樂浪、玄菟、の四郡を平ぐ。

司馬氏魏の政權を握る

三國の滅亡　魏の明帝死せし後ち、司馬懿自ら丞相となりて政を專にす。其子師に至りて始めて廢立を行ひ、弟昭嗣ぎて晉公に封ぜられ、再び廢立を行ふて益專横なり。

時に蜀の姜維、兵を出して魏を攻めしかば、昭は鄧艾（ガイ）、鍾會等をして蜀を伐たしめ、遂に成都を陷れ後帝を降し

蜀亡ぶ

炎

魏亡ぶ

て蜀を滅せり。西紀二六三年

是より司馬昭の勢益强く、遂に晉王となり、其子炎は元帝に迫りて位を禪らしむ。之を晉の武帝となす。西紀二六五年

吳亡ぶ晉の一統

吳は大帝既に死して孫皓位にあり。內暴政甚しく、外、交趾の反亂ありて國勢頓に陵夷せしかば、武帝は杜預、王濬、をして吳を討たしめ、遂に建業に入りて皓を降せり。三國鼎立してより凡そ六十年にして晉天下を一統す。時に西紀二八〇年にして皇紀九四〇年なり。

第二節　兩晉及五胡

武帝の封建

八王の亂　初め武帝は魏の孤立して早く亡びたるに懲り、大に子弟を封して帝室の藩屏となせしが、是れ却て他日の亂階をなせり。武帝吳を滅してより、遊宴に耽り國政を顧みず、惠帝立ちて不慧なり、賈皇后暴戾朝政を恣にす。趙王倫兵を擧げて賈后を殺して自立す。是に於て齊王冏、河間王顒、成都王穎、長沙王乂、東海王越等起て各政權を爭ひ、宗室互に殘滅し、晉國分崩せり。諸王亂に預る者前後八人、故に八王の亂といふ。

清談の流行　東漢の末、名節を重んずるの極、動もすれば偏固に流るゝに至りしが、其反動として、魏晉の間に

士風の頽敗

は氣節を賤み、禮儀法度を顧みず、又經學訓詁の學風廢れて、老莊虛無の說流行し、且當時政權の變動劇甚にして爭亂弑逆多かりしかば、士大夫名を風流清談に托して禍を避くる者多く、魏の王弼、何晏、晉の山濤王戎、王衍等其著名なる者なり。是に於て人々空理を談じて世務を拋ち、又國家を憂ふる者なく、遂に八王の亂と共に晉室の滅亡を招くに至れり。

劉淵

五胡の興起　前漢以來胡人多く塞內に雜居し、次第に勢力を得て動もすれば漢人種を壓せんとするの勢あり。晉室の內訌に當り、遂に五胡の跋扈を來せり。此時劉

石勒

李雄

姚弋仲

慕容廆

拓跋祿官

淵先づ左國城（山西省永寧府）これに據りて漢王と稱せり。これ淵は匈奴の後にして匈奴は嘗て漢の婿たりしを以てなり。又石勒は上黨（山西省潞安府）より起りて淵に從ふ。勒は羯人にして、羯は匈奴の一部族なり。既にして李雄は成都に據りて成王と稱す。雄は氐人なり。尋で羌人姚弋仲は安南より起りて又王と稱せり。氐、羌は共に圖伯特種なり。鮮卑は漢魏の間より頗る强大となり、後ち魏に內屬せしが、是に於て慕容廆は大棘城（盛京省錦州府の邊）に據りて、自ら鮮卑の大單于と稱し、同種拓跋祿官は上谷（直隸省宣化府）の北に據りて、可汗となり、勢威愈盛なり。

劉聰

西晉亡ぶ

東晉

前趙

西晉の滅亡　既にして、劉淵帝と稱して都を平陽（山西省平陽府）に徙し、子劉聰及石勒等をして晉を攻めしむ。淵死し聰嗣ぐに及びて、洛陽を陷れ懷帝を執へ、尋で愍帝の長安に即位するに及びて、復攻めて之を降し、西晉全く滅せり。是時司馬懿の曾孫睿は帝位に建業に即き、江南の地を保つ、之を東晉の元帝となす。時に西紀三一七年なり。

前後兩趙の興亡　漢は劉聰死して、劉曜繼ぎ長安に都して、國號を改めて趙といふ。所謂前趙是なり。尋て石勒曜と隙あり。別に國を立て襄國（直隸省順德府）に據りて、亦趙王

後趙

符健

燕

と稱す。後趙是なり。曜屢勒と爭ひしが、遂に大敗して前趙滅び、勒北方を併有し、氐王蒲洪、羌酋姚弋仲皆之に降るに至り、後趙の勢甚盛なり。勒死して石虎の立つに及び、都を鄴（河南省彰德府）に徙し、北は慕容氏を伐ちて大敗し、南は東晉を侵して志を得ず、西は涼を征して敗績せり。是に於て國勢日に衰へ、遂に冉閔簒して魏帝と稱す。

前秦の興起　是に於て蒲洪、姚弋仲皆自立を謀りて相爭ふ。洪の子健に至り、長安に入り國を建てゝ秦と號し。皇帝と稱せり。時に慕容氏は龍城（盛京省錦州府）に都して、燕王と稱し、後ち冉閔を滅して、鄴に徙り、山東河南を畧して、

代

涼

符堅江北を一統す

桓温

謝安

殆江北を統一するの勢あり。拓跋氏は盛樂に都して代王と稱し、涼は河西の地を有して、共に江北の強國なりしが、前秦の符健死して符堅の嗣ぐや、燕涼代の三國を滅して、悉く江北を統一し、天下を十分して其八を有せり。

東晉の形勢　東晉の初世は、王敦蘇峻の叛ありて國威更に振はざりしが、桓溫出でゝ將たるに及び、西は漢（李壽）を滅して、蜀を併せ、北は趙秦燕を伐ち（自立せしより成を改めて漢といへり）て、國勢漸く強く、溫死するに及びて、謝安相となり、姪謝玄及び桓氏の諸族をして、荊楊の地を守らしめ、以て

淝水の戰

拓跋珪

道武帝

秦に備ふ。符堅既に江北を併呑せしかば、遂に東晉を滅して、海内を一統せむと欲し、戍卒六十餘萬、騎兵二十七萬を率ひて南征せしが、晉將謝石謝玄の爲に大に淝水（安徽省鳳陽府）に破られ、僅に身を以て長安に遁れ歸るを得たり。

江北の分裂　是に於て江北再び亂れ、後燕、後秦、西燕、後涼、西秦、南涼等の諸國陸續として興り、鮮卑の拓跋珪も亦代の舊地を回復して代王と稱し、尋で國號を改めて魏といひ、都を平城に徙して帝位に即く、是を後魏の道武帝となす。（西紀三九八年）是時に當り、南燕、北燕、西涼、北涼等の

吐谷渾
柔然

東晋亡ぶ

諸國新に江北に起りて、互に攻伐を事とし、紛擾止む時なし、且つ西方には鮮卑の支族吐谷渾ありて氐羌を併せ、北方には柔然ありて蒙古の地方を併略し、勢共に強大なり。

東晋の滅亡　東晋は淝水の役後、無事なりしかば苟安に流れ漸く内政の紊亂を來し、孫恩之に乘じて亂を作し、遂に桓溫の子桓玄帝位を簒するに至れり。時に劉裕兵を京口（江蘇省鎮江府）に起して、桓玄を誅し、次で南燕、後秦を滅して、宋王となり、遂に恭帝の禪を受けて帝位に上れり。是を宋の武帝と爲す。（西紀四二〇年）晋武帝より此に至る凡

太武帝

そ十五世百五十六年にして亡ぶ。

江北の統一　宋の武帝即位の時に方り、江北諸國中南涼は既に西秦に滅され、西涼は北涼に併せられ、僅に後魏、大夏、西秦、北涼、北燕の五國を存するのみ、魏の勢最も盛なり。太武帝立て大夏を破りしが、大夏は西に遁れて西秦を滅し、また太武帝の爲めに破れ、遂に吐谷渾に滅さる。後ち太武帝、北燕、北涼の二國を滅し、遂に其北境なる吐谷渾を逐ひ、柔然を退くるに至り、北方全く統一に歸し、天下は分れて南北朝となれり。

儒佛の東流　初め西漢の頃、海東には漢江、江南に馬韓

三韓　高句麗　百濟　新羅

辰韓、辨韓の三韓ありて、數多の小國に分れたりしが、魏の頃に至りて、高句麗、百濟、新羅の三國並び起りて、他の諸邦國を併呑せり、後ち晉の代に至りて、百濟は晉に通じ、高句麗は秦に通ぜしが、符堅深く佛法を尊信し、西紀三七二年を以て是を高句麗に傳ふ。高句麗王乃ち佛寺を創建し、又大學を興せしかば、此に儒佛の發端をなし、高句麗は更に是を新羅に傳へたり。百濟は又別に是を東晉より傳へしが、神功皇后の新羅を征し給ひしより、忽ち儒佛の東流を來し、應神天皇の朝百濟より儒學を傳へ、欽明天皇の朝佛教亦我國に渡來せり。

南朝　北朝

第三節　南北朝

南北二朝の傳紹　南朝は晉の遺業に因り、淮漢以南を領して、宋より齊梁陳の三朝に傳へ、北朝は其北を有して、後魏の一統に起り、後魏後ちに分れて東魏西魏となり、東魏は北齊に傳へ、西魏は後周に傳へ、後周は北齊を併せて隋に傳へ、隋陳を滅して、然して後ち南北渾一す。

宋魏の攻戰　宋の武帝死して文帝立つに至り、魏の柔然を征するに方り、王玄謨をして大擧して北侵せしめ、碻磝を取りて滑臺を圍む。魏の太武帝は自ら大軍に將

後魏の太武帝大に宋を破る

宋亡ぶ

孝文帝

として之を救ひ、玄謨を追擊して之を破り、直に南征して宋の江北六州の地を蹂躙し、揚子江に至りて還れり。是れより魏は益盛にして、宋は漸く衰ふるに至れり。宋は明帝に至りて多く宗室を殘滅せしかば、自ら王室の微弱を來し、遂に權臣蕭道成の爲めに簒奪せらる。之を齊の大祖高帝と爲す。西紀四七九年

魏の隆盛　魏の孝文帝位に在り、頻に中國の文化を慕ひて、鮮卑固有の風習を改め、海内統一の大業を成さむと欲し、民田を均しくし、戸籍を制し、學校を興し、樂章祀典を定め、或は官制を改め、律令を變じ、遂に都を洛陽に

遷し、國服國語を禁じ、姓を元氏と改め、諸弟の爲めに中國の名族を娶る。時に宗室勳舊悅ばざる者多し、帝斷然處分して少しも假さず、國勢日に隆盛なり。然れども南遷の後、武事漸く弛みて風俗華美に流る、他日國勢の衰る又此に始れり。

齊の滅亡　此時に方り齊の蕭鸞弑逆を行ふて自立す。是を明帝と爲す。魏の孝文帝其罪を鳴して齊を攻めしが、克たずして還れり。尋で明帝死して國内大に亂れ、蕭衍遂に和帝を廢して自立す。是を梁の武帝となす。西紀五〇二年

高歡

宇文泰

侯景

後魏の分裂　魏は宣武帝死して孝明帝立つに至り。紀綱大に紊れ、孝莊帝立つに及びて、爾朱榮の亂あり。高歡之を平げて孝武帝を立て、尋で帝と隙を生じて兵を洛陽に出せり。孝武帝走りて關西の大都督宇文泰に依る。是に於て泰は帝を長安に奉じて西魏と稱し。歡は孝靜帝を洛陽に立て後ち鄴に移りて東魏といへり。是より兩魏互に相爭ひ兵を南する能はず。此間南朝は無事を保つを得て文學佛教共に盛なりき。

梁の滅亡　梁の武帝の時、東魏の將侯景河南の地を以て梁に降り、河南王に封ぜられしが、武帝の東魏を伐ち

後梁

陳

齊

勝たずして和を媾するに至り、景疑懼して兵を起し、健康を陷れ、遂に和を結びて大丞相となり、武帝死するに及びて簡帝を立てゝ政權を恣にし、次で帝を弑し自立して漢王と稱す。簡帝の弟湘東王繹は王僧辯、陳霸先を以て景を討平せしめ自ら位に即きて江陵に都す。是を元帝となす。時に武陵王紀も亦帝位に即きて元帝と位を爭ふ。西魏即ち江陵を攻めて元帝を虜にし、元帝の姪詧を立つ是を後梁の宣帝といふ。已にして陳霸先は王僧辯を殺し、健康に據りて自立す、是を陳の武帝と爲す。南北の統一　是より先き、高歡の子洋、東魏を篡ふて北

齊亡ふ

揚堅周を簒ふて隋を建つ

突厥を伐つ

後梁を廢す

陳を滅す

齊と稱し、宇文泰の子覺は西魏に代りて北周を興せり。是に於て、南に陳及び後梁あり。北に齊と周あり。其北に突厥北匈奴の支族ありて勢盛なり。かくて周は陳に通し突厥と兵を合せて齊を侵し、遂に之を滅して北朝を一統せり。後ち周の武帝死して宣帝立つに至り、外戚揚堅諸政を輔け、遂に周室を簒して位に即けり。是を隋の文帝となす、時に西紀五八一年なり。

文帝即位して先つ突厥を伐ちて西北の患を除き、次で後梁を廢し、更に陳を征して是を滅せり。東晋の元帝即位より是に至るまで凡二百七十三年にして隋天下を

文帝の治績

煬帝の奢侈

一統せり。時に西紀五八九年にして、我崇峻天皇の二年皇紀一二四九年に當れり、

第五章　隋唐及五代時代

節一節　隋の興亡

文帝及煬帝　文帝天下を一統して、專ら意を內治に用ひ、親ら勤儉を行ひ、賦稅を輕くし、以て百姓を愛養す。故に戶口增殖して、海內無事なり。

煬帝文帝を弑して帝位に上り、奢侈に耽り大に宮室苑囿を營み、或は運河を開鑿して南北巡遊の便に供し、又

外征

長城を西北二邊に增築し、毎歲巨萬の民力と財用とを耗費せり。帝又遠征を好み、南林邑（安南の南境）を平げ、西は吐谷渾を破り、北は突厥を服し、東南は琉球を伐ち、遂に大擧して高麗を征し鴨綠江に至り大敗して還る。後二年復遼東城（盛京省奉天府遼陽州の北）を攻めて克つ能はず。是に於て、民力全く消耗して、百姓窮困群盜各地に蜂起せり。

群雄の割據

隋の滅亡　李密は河南に據りて魏公と稱し、林士弘は江南に據りて楚帝と稱し、竇健德は漳南（山東省）に據りて長樂王と稱し、劉武周は馬邑（山西省）に據りて定陽可汗と稱し、梁師都は朔方（陝西省）に據りて梁帝と稱し、薛擧は隴

李淵世民

西（甘肅省）に據りて秦帝と稱し、李軌は河西（甘肅省）に據りて涼王と稱し、蕭銑は江陵（湖北省）に據りて梁王と稱せり。是に於て唐公李淵も其子世民の勸めに依りて兵を大原（山西省）に興し、東突厥の援を借り、遂に長安を陷れ、恭帝を立て、尋て禪を受けて帝と稱せり。是を唐の高祖神堯皇帝と爲す。時に西紀六一八年にして我推古天皇の二十六年なり。

第二節　唐の初世

唐の創業　高祖即位の初群雄各地に割據して海內統

世民群雄を平定す

一せず、王世充は洛陽に據りて鄭帝と稱し、竇建德は河北に據りて夏帝と稱し、沈法興は毘陵に據り、李子通は江都に據りて、各帝王と稱し、此他李軌、蕭銑、梁師都等各故地を保ちて、天下を爭ひしが、前後七年にして概ね世民の爲に討平せられたり。

諸名臣の任用

是に於て秦王世民功名日に盛なり。其兄建成太子たり功を忌みて弟元吉と共に世民を殺さんとせしが、世民之を知り先つ發して二人を弑す。高祖即ち世民を立てゝ太子と爲し位を禪る之を太宗となす。

貞觀の治　太宗位に即くに及ひ杜如晦、房玄齡、魏徵、王珪等の諸名臣を用ゐて、勵精治を圖り、弘文館を置きて文學を奬勵し、府兵の制を定めて武備を嚴にし、驕奢を戒めて賦徭を薄くし、刑辟を寛にして專ら下民を撫恤せしかば民悅服して天下昇平なり。是を貞觀の治と稱す。

第三節　唐初外國との關係

突厥の征服　突厥は北匈奴の支族にして金山（甘肅省）の南に住し、柔然の屬部なりしが、後ち其の羈絆を脫し、南北朝の頃に至りて大に興り、西は柔然嚈噠を破り、東は

突厥の分裂

東突厥

契丹を退け、南吐谷渾を降し、北は契骨を併せ、其領土東は遼東より、西は阿拉海に至り、南は沙漠より、北は貝加爾湖に至る。後ち幾もなくして、突厥分れて東西二國となれり。

東突厥は、木扞可汗屢支那の西北邊に寇し、周齊の諸帝皆之と婚を通じ幣を厚くして其歡心を買ふ。突厥是より支那を輕んず、後ち隋の盛なるに當つて之に服事せしが、其衰ふるに及びて、始畢可汗出で、室韋、契丹、吐谷渾、高昌等を併せ、勢日に盛なりしかば、隋末割據の群雄爭ふて突厥に臣事して其援を借れり。

頡利

突利

李世勣

李靖

東突厥を滅す

西突厥

蘇定方

西突厥の平定

既にして頡利可汗立ち、姪突利可汗と共に、兵を率ひて唐に寇すること、前後二回に及べり。後ち突利は頡利と隙を生じて、唐に入朝し、薛延陀は回紇と共に叛きて、頡利を破りしかば、太宗は李世勣、李靖等を遣して、之を擊破せしめ、頡利を擒にして、全く東突厥を滅せり。

西突厥は、射匱可汗及其弟統葉護に至りて、東は金山より、西は阿拉海に至り、北は鐵勒より、南は罽賓に至り、悉く西域諸國を覇有せしが、唐の高宗は、蘇定方等を遣りて、之を伐たしめ、沙鉢羅可汗を擒にし、悉く其地を收めて、濛池崑陵の二都護を置けり。

諸夷の服從。太宗突厥を滅してより、唐の威四夷に振ひ、東北は契丹、奚、霫、室韋、靺鞨の諸部、西は伊吾黨項の諸部來貢せり。次で侯君集等をして、吐谷渾を伐たしめ、又吐蕃高昌を征せしめ、李世勣をして、薛延陀を討たしめたり。是に於て回紇等の諸部内附す。帝高昌の地（甘肅省鎮西府）に安西都護を置き、回紇の南（内蒙古烏喇特部の西境）に燕然都護府を置きて、諸國を統御せしめたり。

侯君集

安西都護燕然都護

吐魯番廳

海東諸國の征服　隋亡びて、唐興るに及び、高麗は百濟と力を合せて、新羅を伐たんとす。新羅救を唐に乞ふ、是に於て太宗親ら高麗を征し、遼東に至り、白巖城を陷れ、

太宗高麗を征す

進みて安市城を圍みしが、城堅くして拔けず、加ふるに天寒く食將に盡きんとせしかば、遂に師を班せり、既にして太宗死して、高宗立つに至り、百濟は高麗靺鞨二國と力を合せて新羅を侵す、新羅救を乞ふこと愈急なり。高宗即ち蘇定方をして、新羅と共に百濟を伐たしめ、國都を陷れ、國王義慈を降せり。（皇紀一三〇年齊明帝の六年）時に義慈王の弟、豐璋我國に質たり。百濟の故將福信等之を迎へて王となし、以て興復を圖り、且つ救を我國に乞ふ。齊明帝舟師を率ひて筑紫に幸し、帝崩ずるに及んで、阿曇比羅夫等太子の命を奉して趣き救ひしかども、

百濟亡ぶ

日唐の衝突

高麗亡ふ

安東都護

我軍利あらず、百濟王豐高麗に奔り、百濟全く滅ぶ。皇紀一三二年

已にして、高宗は李世勣をして、新羅の兵と共に平壤を陷れしめ、全く高麗を滅して、安東都護府を平壤に置き、以て海東の地を統御せしむ。

日唐の交通　我國西邊の民が私に支那に交通せしは、已に西漢の頃にあり。後ち神功皇后の三韓征伐以來、朝鮮を經て支那の交通稍開けしが、推古天皇の隋に使を遣しゝより、彼我の修好漸く繁く、唐に至りて一旦百濟の事に依りて相爭しも、高宗の劉德高等をして使聘を通せしむるに及び、兩國の修好また成り、唐の末世に至るまで遣唐使の往來絶へず。

羈縻州八百六都護

唐の國威　唐初外征の狀況此の如くなりしかば、威令の及ぶ所、東は鴨綠江を踰え、西は興都克士山に跨り、南は林邑を盡し、北は骨利幹（露國エニセイスク州邊に居れり）に至り、內屬の諸部を以て羈縻州となすもの八百の多きに及び、六都護を置きて之を統轄せり。當時安東都護は朝鮮を鎭し、安北都護は漠北を鎭し、單于都護は漠南を鎭し、北庭都護は西北諸部を鎭し、安西都護は西域を鎭し、安南都護は南海諸國を鎭せり。當時唐の勢力は古來嘗てなき盛

大を極めたり。

第四節　唐の中世

武氏の禍

武韋の禍　太宗死して高宗位に即き、太宗の宮女武氏を後宮に入れ、遂に立てゝ皇后となす。武氏性明敏にして、政事に參與し、權人主に等し。高宗死して中宗立つ。僅に二月にして之を廢して弟旦を立て、朝に臨て制を稱し、宗室貴戚を誅夷し、自ら聖神皇帝と稱し、國號を周と改む。武氏嬖倖多く內行修らず。然れども權略ありて能く人材を擧用せしかば、將相其人を得て、國政紊亂せざ

國號を周と改む

張柬之

韋氏の禍

隆基

るを得たり。晩年に至り武氏政を親らせず、嬖人張易之・張昌宗の二人大に權を弄せしが武后病むに及び、宰相張柬之宮中に入りて之を斬り、武氏に迫りて位を中宗に讓らしむ。是に於て唐室復興す。（西紀七〇五年）

初め中宗の廢せらるゝや、皇后韋氏常に帝に從ひて艱厄を共にす。帝深く之を恩とす。位に復するに及んで、韋氏も亦朝政に預る。既にして武三思と通じて、張柬之等を退け、遂に帝を弑し、朝に臨みて制を稱す。睿宗の子隆基兵を起して韋氏及其黨を誅し、睿宗を迎へて之を立て、尋で其禪を受く、之を玄宗となす。

姚崇宋璟

李林甫

楊貴妃

安祿山

開元の政　玄宗即位の始め、姚崇宋璟等の名相を用ひて、勵精治を圖り、賦役を寛平にし、百姓爲に富庶なり。稱して開元の政と云ひ、以て貞觀の治に比す。

安史の亂　玄宗在位已に久して漸く奢侈を好み、李林甫相たるに及んで、頗る聰明を蔽ひ朝政を紊る。楊大眞を納れて貴妃とし、之を寵し、其一族を重用す。是より諸政益弛廢し、遂に安史の亂を生ずるに至れり。安祿山はもと營州の雜胡なり、性狡黠にして才勇あり、帝の寵妃楊氏に結びて、深く帝の信任を受け、初め平盧の節度使となり、尋で范陽河東の節度使を兼ね、爵を東平郡王と

楊忠國

大燕皇帝

回紇の援兵

慶緒

史思明

賜ふ。祿山是より威勢を恃みて漸く唐を輕んずるの志あり。李林甫死して楊忠國相たるに及び、素祿山と隙あり、祿山遂に反し所部の兵及奚・契丹の兵十五萬を率ひて南下し、洛陽を陷れ、自ら號して大燕皇帝といへり。西紀七五五年　是に於て顏眞卿・顏杲卿・郭子儀・李光弼等各義兵を擧げて、之を禦きしかども、賊勢盛にして進んで潼關に入り、帝は倉皇蜀に走り、位を太子に讓る。太子賊を避けて位に靈武甘肅府靈州に即く、之を肅宗となす、既にして回紇の援兵來り、官軍漸く勢を得たり、偶祿山は子慶緒に殺され、其將史思明亦慶緒を殺し、思明も亦子朝義の爲

朝義

回紇

懷仁可汗

めに殺され賊勢頓に衰へしかば官軍之に乘じて、長安及洛陽を復す、既にして賊將李懷仙、朝義を殺して降る。是に於て八年の内亂全く平ぐ。

塞外諸國　唐は安史の亂以來、邊防全く廢す、是に於て塞外の諸部復起りて、内地に寇するに至れり。

回紇は鐵勒の一部にして嘗て高車と稱し又韋紇といへり。太宗の東突厥及薛延陀を滅するや回紇其地に據り、玄宗の時に至りて全く突厥の餘衆を降し、悉く東突厥の故地を奄有して國勢極めて强し。玄宗其主を册して懷仁可汗となす、安史の亂後唐室衰弱して屢援兵を

黠戛斯

吐蕃

請ひ、歲幣を厚くし、且公主を與へて是に報ゆ。回紇是より尊大にして往々邊地に寇す、唐禁ずる能はず。其後牟羽可汗弑せられて、天親可汗立つに至り回紇を改めて回鶻となせり。後ち國勢漸く衰へて黠戛斯の爲めに破られ、餘衆磧西に奔り其國散亡殆んど盡きたり。

吐蕃は漢の西南夷の後にして、圖伯特種に屬す、唐の初國勢漸く强し。太宗の時吐谷渾黨項等を破りて松州四川省に寇す。太宗侯君集をして擊て之を降す、後ち高宗の時吐谷渾を滅し、羊同黨項を併せ、更に西突厥の餘衆を連ね、龜茲疏勒の諸鎭を陷れ、悉く西方一帶の地を奄有

吐蕃長安に侵入す

して屢唐の邊地に寇す。高宗其勢を恐れて爭ふ能はず、吐蕃益强大となれり。是に於て安史の亂に乘じて盡く河西隴西の地を奪ひ、代宗の即位元年（西紀七六三年）遂に長安に侵入し帝陝州に走る。郭子儀兵を率ひて之を禦ぐに及び、吐蕃引去る。爾後唐に内亂ある毎に或は回紇を率ひ、或は高昌と共に入寇し、西邊其患を絶たず。

南詔

東南の蠻族六部に分かれ、之を六詔（詔は王の義）と云ふ、蒙舍詔は其最南にあるを以て南詔と云へり、玄宗の時南詔他の五詔を併呑し、盡く雲南の地を取りしが、帝之を冊して雲南王となせり。後ち南詔吐蕃と通じ安史の亂後

渤海

屢四川に寇せり。

渤海は靺鞨の粟末部に屬し、世々高麗の北に住せしが、高麗滅ぶに及び勃興して一强國となり、部人大祚榮唐軍を擊退し、高麗の故地を略して自ら震王と稱し、遂に玄宗の封を受けて、渤海郡王となれり、其子武藝王立ちて、益境土を開き、始めて使を遣して、我日本に通ぜり。時に聖武天皇神龜五年なり、後ち國勢益盛にして、唐の世を終るまで海東の最盛國なりしが、五代の世に至りて滅べり。

日渤の交通

第五節　唐の末世

藩鎮の跋扈　玄宗の時十節度使を邊要の地に置きしが、安史の亂後內地にも多く節度使を置けり。節度使はもと武官なれども、多くは數州を統べて甲兵土地財賦の三權を握り、所部の文武官を有せしかば、勢漸く强大となり、遂に其職を世襲して列侯の如く、或は部下の士卒自から將帥を擧げて任命を朝廷に强請す。朝廷力微にして徒に其歡心を買ひしかば、藩鎮の跋扈益甚しく、恣に兵を募り、貢賦を納めず、或は合同して朝命を拒み、或は一方に割據して帝と稱するものあるに至れり。後

ち憲宗立ちて英武なり。賢相杜黃裳の議を用ゐて、武力を以て諸鎮に對し、名將武元衡等を用ゐて先づ西川、鎮海、淮西、河北等の諸鎮を征せしより、盡く朝命に遵ふに至れり。

宦官の跋扈　宦官は玄宗の時より漸く勢を得、肅宗代宗皆庸弱にして宦官に倚賴せり。是より權益加り、德宗以後は遂に軍國の大事に參與して、專橫至らざるなく、恣に天子を廢立し、憲宗敬宗二帝を弑するに至れり。文宗夙に宦官の專恣を怒り、鄭注、李訓等と共に誅夷の策を講じ、甘露の變を企てしが、謀遂に成らずして、却て其

李德裕
李宗閔
牛僧儒

暴威を加へ、天下の政權皆な其手に歸し、宰相は唯文書を行ふに過ぎず。

牛李の黨爭　牛李の黨爭は穆宗の世に始まり、宣宗の世に終る、四十餘年間朋黨の爭にして、藩鎭及び宦官の跋扈と共に唐室衰亡の源因をなせり。穆宗の時李德裕翰林學士と爲り、中書舍人李宗閔が嘗て父李吉甫を譏切せしの故を以て之を構貶す。是に於て始めて黨爭の端を開き、互に黨人を率ひて政權を爭奪し、文宗以後宗閔は牛僧儒を引きて其黨となし、兩黨相位を爭奪すること前後數回に及び、互に相擠援して紛擾せしが、宣宗

宣宗
黄巢
李克用
朱全忠

の世に至りて兩黨の首領皆死歿して黨爭始めて熄めり。

唐の滅亡　宣宗明察にして一時紀綱を張り、吐蕃黨項の衰微せるに乘じて河西隴右の地を復せしも、藩鎭の跋扈と宦官の專横は依然として拔けず、帝崩じて懿宗僖宗皆庸君にして奢侈を好み、賦歛愈急なりしかば、盜賊各地に起り、黄巢反して東都を陷れ、尋で長安に入りて自ら齊帝と稱す。是に於て僖宗蜀に出奔せり。是時西突厥の別種なる沙陀の部長に李克用あり。帝之を召して黄巢を討平せしむ。時に賊將朱溫降り名を全忠と賜

ふて節度使となる。克用と合はずして互に敵視せしが、昭宗立ちて恢復の志あり。宰相崔胤と謀り宦官を滅さんとするに當り、全忠を召す。全忠竊に天子を挾んで天下に號令せんとす。是に於て直に兵を率ひて京師に入り、悉く宦官を誅除し、功を以て梁王となる。（西紀九〇三年）既にして全忠簒奪の志あり、密に崔胤を殺し、帝を促して洛陽に遷らしむ。遂に帝を弑して哀帝を立て、尋で其禪を受けて帝位に上る。是を梁の太祖となす。時に西紀九〇七年にして我醍醐天皇延喜七年なり、唐は高祖より是に及まで二十世凡二百九十年にして亡ぶ。

第六節　唐の制度

唐の制度は、啻に支那歷代の典範となりしのみならず、嘗て我國の移用せし所なれば、今爰に其一斑を述べんとす。

官制　唐の中央政府には、三省ありて、天下の政事を統べ、其下に六部ありて、行政事務を分掌す。三省とは、尙書、門下、中書をいふ。中書省は詔勅の宣奉を掌り、其長を中書令と云ひ、門下省は詔勅の審査を掌り、其長を侍中と云ひ、尙書省は詔勅の施行を掌り、其長を尙書令と云ふ。

六部

其副に左右僕射あり。尚書省の下に六部あり、又左右に分れて、各僕射を以て之を統ぶ。左僕射は吏、戸、禮の三部を統べ、右僕射は兵、刑、工の三部を統ぶ。又別に一臺（御史臺）九寺（大常、光祿、衛尉、宗正、大僕、太理、鴻臚、司農、大府）、五監（少府、長秋、國子、將作、都水）、十六衛府（左右衛府、左右驍騎衛府、左右威衛府、左右領軍衛府、左右金吾衛府、左右監門衛府、左右千牛衛府）、ありて以て文武の諸政を總攬す。以上の外に三師（大尉、司徒、司空）、三公（大師、大傅、大保）ありと雖も、共に則闕の官にして常設の官にあらず。

地方官制

地方の官制は、府に牧尹あり、州に刺史あり、縣に令ありて、民治を掌り又道毎に巡察使ありて、是を監察せり。

均田の法

田制及税法　唐は班田の法を用ひて、毎歳十月より十二月の間に收授し、丁男年十八以上の者には官田百畝を給し、其八十畝を口分田とし、二十畝を世業田として、子孫に傳ふ。税法は租、庸、調の三種にして、租は百畝の田より粟二石、庸は一歳に二十日、調は其産する所に從て絹、綾、絁（長さ各二丈）麻布（二丈四尺）の類を出さしめ、三歳毎に戸籍を造れり。

租、庸、調

折衝府

兵制　唐は天下を十道（關內、河東、河南、河北、山南、隴右、淮南、江南、劍南、嶺南）に分ち、折衝府六百三十四を各道に配置し、府を三等に區別し上府は千二百人、中府は千人、下府は八百人の兵を備へ、折衝都尉之を統率す。平時は耕作を務め、或は京師に上番

して宿衛し、事あれば符契の下ると共に出兵す、凡そ民二十にして兵となり、六十にして之を免ず。

軍隊の組織は十人を火とし、火に長一人あり、五十人を隊とし、隊に隊正一人あり。三百人を團とし、團に校尉一人あり。

法制　唐は隋の舊に依りて、五刑（苦、杖、徒、流、死）、十二律（名例、衞禁、職制、戶婚、廐庫、擅興、賊盜、鬪訟、詐僞、雜律、捕亡、斷獄）を設け、十惡八議の制を立てたり。

第七節　學藝及宗教

學制　唐の學制は京師に國子學、大學、四門學、律學、書學、算學、ありて、國子監に屬し、別に門下省に弘文館あり、東宮に崇文館あり、府州縣亦各學校ありて、士民の教育に力を盡せり。

唐の學風

儒學　唐は九經（禮記、左傳、詩、周禮、儀禮、書、易、公羊、穀梁）を以て學生に課し、兼て孝經論語を學ばしむ。太宗孔穎達、顏師古に命じて五經正義を撰ばしめしより、註疏の學は發達せしと雖も、學者皆な正義の範圍を出ずして、敢て新說を唱ふる者なし。

韓退之

詩文　唐は六朝の餘弊を承けて、詩文猶纖弱の風を脫せざりしが、玄宗に至りて全く一變せり。當時韓退之あ

柳宗元

李白
杜甫
白居易

玄奘

義淨

り、力を古文に用ひ、柳宗元また之に和して雄健の風を尚び、遂に八代の陋習を破りて、周漢醇朴の古體に復せり。詩に於ては李白、杜甫、白居易の三人ありて、能く前代の積弊を除き遂に文藝熾昌の盛運を開けり。

佛教　佛教は南北朝に於て其盛を極めたりしが、唐に至りて又大に興れり。太宗の時有名なる玄奘出でゝ、遠く印度に入り、百餘國を遍歷し、其間十七年の歲月を費し、六百五十餘部の經論を齎して、長安に歸り、尋で義淨も亦印度に航し、二十五年を經て、四百部の經典を携へて歸國せり。後ち善無畏、金剛智、不空の徒相つぎて印度

佛教の頓挫

老子を廟祀す

より來り、文宗の時には寺數四萬を越へ、僧尼の數七千餘萬に達し、三論、法相、律、華嚴、天台、眞言、禪、淨土等の諸宗派を生じて、盛に弘通せり、其餘響は延きて我國に及ぶ。武宗に至り道教を好みて佛教を排し、寺院四萬を毀ち、僧尼二十七萬を還俗せしめしかば、佛教爲めに一大頓挫をなせり。

道教　道教は方士の徒が老莊の說に附會して作りしに者にして、漢魏晉の際には張陵葛洪寇謙等ありて各神仙の術を講じたりしが、唐に至り國姓李にして老子と同姓なりしより、方士等之に乘じ、老子を以て唐の祖先

とせり。是に於て唐は之を廟祀し、天下に令して各戸に道德經を備へしめ、崇玄館を開きて玄學を講ぜしむ。武宗痛く佛教を抑損して道教を用ひしより、益隆盛を致せり。

回教　回教は亞刺比亞のモハメッドの開きし宗教にして、サラセン帝國の勃興と共に一時西亞地方に蔓延し、唐の初に當り亞刺比亞人の海商と共に廣東地方に渡來せり。

祆教　祆教はパクトリアのゾロアスタが開きし宗教にして、波斯の拜火教是なり。南北朝の頃より漸く支那

阿羅本
波斯寺
大秦景教流行中國碑

に入り、唐の初めに至りて盛に行れたり。

摩尼教　摩尼教は波斯の摩尼が開きし宗教にして、拜火教に基づきて基督教を折衷せしものなり。唐の初め支那に入れり。

景教　景教はネストリウスの開きし基督教の一派にして、盛に波斯に行れたりしが、南北朝の末より支那に入り、唐の太宗の時其徒阿羅本（オロボン）經典を齎して長安に來る、（西紀六三六年）太宗之を尊信して、其布教を許し、爲に波斯寺を建て、高宗玄宗亦之を奬勵せしかば、景教大に流行す。德宗の世に建てられし大秦景教流行中國碑あり、由て

以て其狀體を察すべし。

是等の西域諸教は、當時西亞文明の中心なる亞剌比亞人に依りて、頻繁なる東西の交通と共に、次第に東漸して支那に入り、皆な多少唐の中世に行はれしが、武宗の道教を信じて自餘の諸宗教を嚴禁せしより、概衰滅に歸せり。

第八節　契丹の興起

契丹の起源　契丹は東胡の遺種にして、潢河の北鮮卑の舊地に起り、後魏の時より其衆やゝ滋蔓し、唐の時に

八部大人

阿保機

大祖の時契丹の領土

至り叛服常ならず。八部に分かれ各部大人あり、更に其内より一大人を推して全部を統領せしめ、三年一たび交代す。唐末に至り耶律阿保機選まれて大人となり、性勇智にして諸部の大人を誘ひ殺し、こゝに世襲の制を初む、是契丹の大祖なり。

大祖の攻畧　大祖大に内治を革新し、更に進みて四方の攻畧を初め北室韋、女眞を侵し、南回紇を畧し、青海天山附近の諸部を征し、還り來りて渤海國を襲ひ之を降す。是に於て其領土内蒙古を蓋ひ、東は新羅國より、西は吐蕃、回紇、大食の諸國に至るまで皆來貢す。

廢立

群雄割據

太宗の南下　渤海征服の翌年大祖死す。后、太子を廢して次子を立つ。之を太宗とす。時に支那は五代の世にして國内大に亂る太宗之に乘じて侵畧し、遂に南下の功を奏せり。

第九節　五代の興亡

後梁　唐亡びて後を五代の代といふ。其間五十二年天下大に亂る、朱全忠大遼に據りて帝を稱すれども其領土纔に中原を有するのみ。李克用は河東に據りて晉王と稱し、李茂貞は鳳翔に據りて岐王と稱し、楊行密は淮南に據りて吳王と稱し、王建は兩川に據りて蜀王と稱し、各、猶ほ唐の正朔を用ゆ。其他の諸藩鎭は梁の强勢を畏れて其治下に服する如くなるも、實は他と同じく皆列國の勢をなせり。晉尤も强大にして、連年兵を出して梁を攻む。克用の子存勗嗣ぎて立ち、勇略あり。梁の潞を攻むるに會ひ大に之を破り、國勢益盛にして、終に帝位に即く。之を莊宗となす、國號を唐と改む。之より先き全忠は次子に弒せられ、第三子之を誅して位にあり末帝といふ。莊宗大擧して梁に入り、末帝死して梁亡ぶ。西紀九二三年

李存勗

後梁亡ぶ

海内少康

石敬塘

後唐　莊宗既に梁を滅し、都を洛陽に遷す。兵を出して四方を攻畧し黄河の南北關中四川の地悉く其版圖に歸し。諸侯王の入貢する者前後相踵ぐ。茲に於て漸く驕恣となり、宴樂に耽けりしかば、將士怨望する者あり。莊宗の養子李嗣源を奉じて大梁に據る。偶〻莊宗其臣下に弑せられ、嗣源遂に洛陽に入りて位に即く、明宗之なり。位に在ること八年、海内少しく康し。子閔帝嗣ぎて立ちしが、先帝の養子李從珂之を逐ふて自立す。河東の節度使石敬塘威名あり、從珂兵を遣はし之を除かんとす。敬塘は契丹の後援を得て、大に後唐の兵を破り、進みて洛陽に入り、位に即く。之を後晋の高祖となす。西紀九三六年

後唐亡ぶ

出帝

後晋亡ぶ

後晋　後晋の國を得しは契丹の力に頼る。高祖よりて十六州を割きて之に報い、且つ歳々帛三十万を贈り、臣と稱して之に事ふ。高祖死して出帝立ち屈從を辱ぢて又臣と稱せずたゞ孫と稱す。契丹怒りて入寇す。出帝親征して二たび之を破りしが、是より漸く驕恣の念を生じて、復た意を北邊に注がざりしかば、契丹の大宗之に乘じて再び來寇し、大梁を陷れ出帝を擒にし、後晋亡ぶ。西紀九四六年

後漢　契丹の大宗は晋を滅ぼせし翌年大梁に入り、國

契丹北歸

劉知遠

號を建て、遼と曰ひ、晉の諸藩鎭皆之に服す。然るに胡騎を縱ちて剽掠を恣にせしかば、人民怨憤して將に立つて之を逐はんとす、太宗中國の制しがたきを歎じ、鎭を置いて又北に還り、途に疾みて死す。大遼に在ること僅かに三月なり。此よりさき河東の節度使に劉知遠と云ふ者あり。もと晉の高祖に仕ふ。高祖死して遺命により出帝を輔く。既にして職を止められ不平なり、故に晉の亡ぶるに際し、傍觀して救はず。晉陽に在りて帝と稱す。茲に至り契丹の北歸するに乘じ大梁に入り、國號を漢と更む。後漢の高祖是なり。翌年死し、隱帝嗣ぎて立つ、

後漢亡ぶ

劉崇

四方叛する者多し。帝郭威を遣はして之を平げしむ。郭威は先に高祖に勸めて帝を稱せしめし者なり。亂平らぐに及び左右の讒を入れ之を疎んじ。出でゝ守たらしめ、尋で人をして殺さしめんとす。郭威其寃を訴へんと欲し、大兵を率ひて大梁に趨く。帝之を拒ぎて亂兵の中に弑せらる。郭威よりて隱帝の叔父劉崇の子を迎立てんとす。偶、契丹の入寇あり。兵を率ゐて防禦に趨く。途上將士之を擁して帝位に即かしむ。後周の大祖是なり。西紀

一九五年

後周　是よりさき劉崇郭威と隙あり。郭威の即位する

周の世宗

を聞き、晉陽に據りて帝を稱し、國號を北漢といふ。援を契丹に求めて屢、北邊に寇し、常に利あらず。太祖の子世宗立つに及び機乘ずべしとなし、また契丹の援を假て來り侵す。世祖伐ちて大に破り、之を晉陽に圍む。劉崇憂憤して死す、世宗天資英邁にして海内を一統するの志あり。大に軍を簡錬し、之を率ゐて先づ後蜀を破り、南唐を降し、更に契丹を討じて瓦橋關南の地を平げしが、進みて幽州を征せんとするに及び、疾を獲て大梁に還り、やがて死す。子恭帝嗣で立ち、幾もなく趙匡胤之が禪を受く是を宋の太祖となす。時に西紀九六〇年にして、我

五代終る

朝鮮三裂

朝鮮一統

村上天皇の天德四年なり。是に於て唐末以來分裂したる天下漸く一に歸す。

高麗の興起　朝鮮は唐の世に新羅之を一統し、其後明君相踵ぎて出で國内能く治まりしが、眞德女王の時に至り、佞臣權を弄せしより、國亂れて群雄四方に起り、朝鮮復た分かれて新羅、高麗、後百濟の三國となる、新羅は百濟に其都城を陷れられ、高麗に降る。高麗の大祖王建之を納れ、百濟と戰ひ之を滅して朝鮮を一統し、契丹と境を接す。西紀九三六年

第六章　兩宋時代

第一節　宋の初世

大祖の出處

宋の一統　宋の大祖趙匡胤は周の宿將なり。嘗て世宗に從て征伐し、屢、大功あり、士卒之に服す。恭帝立つに及び、偶、契丹の來寇あり。將士に擁立せられ、遂に恭帝の禪を受く、時に吳越、南漢、北漢、後蜀、荊南、湖南、南唐の諸國猶ほ獨立し、周の遺臣或は南唐に或は北漢に通じて大祖に抗する者あり、大祖、宰相趙晉と謀り、先づ國礎を確立せんと欲し、唐季以來國家の大患たる藩鎭の權を收めんため武臣の節度使を罷め、之に代ふるに文臣を以て

趙晉藩鎭の權を收む

宿衞豪橫の患を絕つ

し、諸州に通判を置きて民軍の政を治め、轉運使を置きて租稅を管理せしむ。是に於て藩鎭の權初めて輕く、朝威漸く地方に及ぶを得たり。帝は又諸州の兵を選みて禁旅に補し、禁旅を出して邊城を守らしめ、常に相交代するの制を立て以て五代以來の弊たる宿衞豪橫の患を絕つ。

外征

國礎既に成れり、以て他を謀るべし。即ち連年兵を出して四方を討平す其の國を攻むるや奪掠を止め漫に人を殺すを禁じ、降る者は皆之を存す。北漢は契丹の後援あり帝屢、征すと雖も平らぐる能はず。大宗の世に至り、

漸く之を降すを得初めて宋の天下一統せり。

安南　安南は交趾の一名なり。唐の時之に屬せしが五代に至り丁部領之によりて獨立し、瞿越國を立つ。宋の大祖の時部領入貢し交趾郡王に封ぜらる。部領死して內亂あり。大祖之を討じて功なし。瞿越の軍事總督黎桓丁氏を廢して自ら國王となり、宋の大宗の時入貢して郡王に封ぜらる。（西紀九九三年）交趾之より一外藩たり。

丁部領

黎桓

遼宋の關係　宋の大宗は北漢を滅し、勢に乘じて遼の南を侵かす。遼主景宗は耶律休哥を遣り大に之を高梁河に破り、進みて瓦橋關を圍む、之より二國の交全く破

景宗

宋、遼に破らる

れ、爾後二十餘年、河北の地は兩軍の交戰場となれり。遼は景宗死して聖宗立ち猶幼なり、母氏攝政す。大宗之に乘じ、曹彬をして之を伐たしめしが却へりて大に破らる。宋は之より防禦のみに心を傾け又進取に意なきを以て嘗て宋と共に遼の夾擊を約せし高麗、女眞の二國は遼に降れり。宋の大宗死し、眞宗嗣ぐに及び、聖宗大擧して宋を侵し、澶州に迫る。宋の宰相寇準眞宗を奉じて北伐す。遼軍沮む色あり。然れども宋は連年の交戰に懲り。歲銀十万兩、絹二十万匹を贈り、宋遼兄弟たるの約を結びて和す。是を澶淵の盟といふ。（西紀一〇〇四年）

聖宗

遼敗る

高麗女眞遼に下る

澶淵の盟

高麗

高麗、遼の屬國となる

遼の版圖

遼の盛衰　遼の聖宗の時、高麗に君たる者は、大祖の孫成宗なり。聖宗は高麗の宋に通ずるを怒りて之を伐つ。成宗救を宋に請ふ。應ぜず、遂に遼に降る、穆宗成宗に繼ぎて立ちしが康兆之を弑して顯宗を立つ、聖宗問罪の師を興して之を伐つ、高麗防ぎて利あらず、國都開京陷り、聖宗は軍を還せしが、此より高麗は連年遼兵の侵入を受け遂に貢を納れ臣を稱す。（西紀一〇一九年）聖宗は更に轉じて西河西の回紇を征し、又東して渤海の遺孽恢復を圖れる者を滅す。此に於て遼の版圖は東日本海に臨み、南は支那本部の北部を包み、西遙に天山の麓に境し、北

拓跋思恭

繼捧

繼遷

德明

はケル、シ河に至る。當時遼に貢を納るゝもの六十國あり。

西夏の興起　宋遼頻年事を搆ふるに乘じ、西方に新に國を興す者あり、之を西夏となす。西夏は黨項の後にして圖伯特族に屬す。其祖拓跋思恭唐末に功を建て節度使となりて夏州に居り、李姓を賜ふ。傳へて繼捧に至り一族を率ゐて宋に歸し、其地を献ず。其族弟繼遷は衆を聚めて遼に降り夏王に封ぜられ、屢〻宋邊を侵す、宋繼捧に姓名を趙保忠と賜ひ、夏州に鎮し、繼遷を圖らしむ。後保忠亦遼に降る。繼遷後流矢に中りて死し、其子德明嗣

ぎ、宋遼兩朝に臣事す、其子元昊性雄毅にして大志あり位を嗣ぐに及び、號令を修明し、諸部を勒し文武官を置き、蕃漢學を立て、自から蕃書を作りて、國人に教ふ。回鶻を擊ちて盡く河西の地を取り。興慶に都し、大夏皇帝と號し、大兵を率ゐて宋の西邊に寇す。時に宋は眞宗既に死し、仁宗位に在り韓琦范仲淹等をして之を防がしめ互に勝敗あり。之より宋の西邊連年騷然たり。

宋遼國勢の比較

宋遼夏の和　此時に當りて宋の領内民殷に國富むこと契丹に數倍す。然れども、武力は及ばざる者あり。遼は興宗嗣ぎて位に在り。宋夏の事あるに乘じ使を宋に遣はして、嘗て周の世宗の畧せし故地を求め、之を威嚇する爲め兵を南京に聚めて南下の勢を示めす。仁宗止むを得ず、歲幣銀絹各十萬を增して和を講ず。遼既に宋と和し、更に西夏を諭して宋と和せしむ。西夏の元昊書を宋に送り歲幣銀綺絹茶二十五万を賜へといふ仁宗之を許し、元昊を册して夏國主と爲す。宋歲幣を二國に送るに、夏に對しては賜といひ、遼には納といへり、以て當時遼國の勢力を察すべし。

宋遼の和

遼夏の勢力

仁宗の治　仁宗在位四十二年、恭儉にして民を愛することと終始變ぜず。屢、輔臣を召して政治の策を問ふ。又諫

歐陽脩
王素
夏竦
杜衍

黨患の端

官を增置し、歐陽脩王素等を以て之に充つ、脩等事を論ずる切直にして小人便とせず、帝夏竦を擧げて樞密使となさんとす、諫官奏して杜衍を以て之に代ゆ。國子直講石介之を聞き快事となし、詩を作り竦を目して大姦となす。然るに之よりさき皇后郭氏廢立の事より朝臣自ら二派に分かれ。相爭ひしが此に於て竦等其黨と共に論を作り衍等を目して黨人となせり、修朋黨論を作りて之を駁せしより其爭益〻激烈を加へ、此に黨患の端を開けり。

神宗
王安石
青苗法

第二節　宋神宗の政策

王安石の新法　仁宗死して英宗立ち。英宗に嗣ぎて立ちし者は神宗なり。年少氣鋭にして、祖先以來宋が外國より受くる屈辱を雪がんと欲す。然るに年々遼及西夏に致す多額の歳幣等の爲め國庫缺乏を告ぐるを以て、先づ王安石を擧げて之を計らしむ。安石即ち青苗募役市易の諸法を立てゝ之に對へ更に兵を强くせん爲めに保甲、保馬の二法を行ふ。右諸法の中青苗法は毎春錢を民に貸與し、秋熟の時二三割の利子を加へて還納せしむる者にて、最有名にして、又最弊害を民に及ぼせり

と云ふ。

對外策　神宗は先づ西夏を滅ぼし、交趾を平げ然る後全力を遼に注ぎて北邊を復し、以て國威を張らんとす。之より先き交趾は宋に通ぜしが後幾もなく宿

交趾

將李氏郡王を廢し、自立して國を大越國といふ、其孫日尊の時に至り、國内の制度を改め、國運盛なり、神宗の時日尊の子乾德位に在り、占城と戰を搆ふ、神宗是に乘じて竊に之を伐たんとす。

乾德

乾德怒り、大擧して宋の南邊を侵かす。宋遂へ伐ちて之を破ると雖も、兵を失ふことも亦夥し。（西紀一〇七五年）

宋と西夏

西夏の李元昊宋と和してより、二十餘年間西邊無事なりしが、神宗に及びて宋軍西夏を襲ひしより、和再び破る。時に元昊の子秉常帝位にあり。屢〻宋の邊境に寇す、宋の元豐四年に至り、西夏に内亂あり。宋軍之れに乘じて夏の地を侵かせしが、却りて大敗し、再び和を講ず（西紀一〇八一年）

遼宋を侵す

遼は宋の西夏に事あるに乘じ新に兩國の境界を定むるを名とし宋の北邊を奪ふ、宋之を如何ともする能はず

對外策の失敗

茲に於て神宗の對外策は全く失敗に歸せり。

新舊兩法黨の爭　神宗の政策はまた國内黨爭の爲めに新に其端を開けり、王安石の新法は其目的單に國庫

蘇轍
司馬光
韓絳
呂惠卿
章惇

充實にあるを以て人民之を喜ばず。當時の學者蘇轍等其祖宗の制に違ふを以て歐陽脩司馬光等と共に之を攻擊す、安石聞かずして之を斷行し敢て非難を試むる者は皆之を黜け、韓絳、呂惠卿の徒と共に朝政を執る、神宗死して、子哲宗幼なるを以て皇大后高氏政を攝し、安石の黨を黜けて、司馬光以下の舊法黨を任用し。悉く新法を罷む。

司馬光相たること八月にして死せしかば、舊法黨は首領を失ひ三黨に分かれて相軋轢す、時に安石既に死し新法黨は章惇是が首領たり、舊法黨の和せざるに乘じて勢を恢復し、太后死して哲宗政を親らするに及び章惇、呂惠卿、蔡京等再び朝に入りて新法を復し、呂大防、范純仁、蘇軾、程頤等を貶竄し、司馬光等の謚號を追奪す

呂大防
范純仁
蔡京

徽宗哲宗に繼ぎて位に即くに及び、亦幼なるを以て太后向氏政を攝し再び舊法黨を用ゐしが、徽宗政を親らするに至り、蔡京復入りて相となり、悉く反對黨を黜く、徽宗暗愚にして奢侈を好み大に土木を起し、四方の珍奇を徵し費用足らざるを以て蔡京新法によりて收斂を圖り、以て帝の寵遇を固くし、獨り國政を擅にすること前後二十年其子蔡攸も亦權勢父に亞ぎ、蔡氏の一族

朝に充滿す。

第三節　金遼の興亡

熟女眞

金の興起　金は初め女眞といひ、黑龍江の沿岸に蕃殖し、渤海の盛時之に屬せしが、遼の渤海を滅ぼすに及びて其松花江附近に在るものは遼に屬して熟女眞と呼ばれ、其東北にある者は遼の籍に入らずして生女眞といへり、生女眞に完顏部あり、西紀一〇四〇年頃烏古廼其部長となり、雄武にして近隣を征服して漸く强大なり。遼主眞宗命じて生女眞の節度使となす、烏古廼の孫

生女眞

烏古廼

阿骨打

阿骨打に至り、大志あり、遼の天祚帝の淫虐にして國政を顧みざるに乘じ遼に叛きて松花江附近の地を侵かし、遂に國號を立てゝ金といひ、帝を稱す、金の大祖即ち是なり。西紀一一一五年

遼の滅亡　遼は興宗聖宗の後を嗣ぎて猶ほ盛時の態を維持せしが、子道宗に及びて文學を尚び佛教を重んじ士風漸く柔弱に流れ、諸部又背き去る者多く國勢次第に衰ふ。天祚帝嗣立するに及び金叛して來り侵す、帝大軍を率ゐ松花江に至りしが、陣中亂作るを以て引き還る、金の大祖之を追擊し、熟女眞を降し、遼の東京を陷

道宗

天祚帝

童貫

馬植

宋金同盟

れ、更に進みて上京に迫る。

是よりさき宋の蔡京は邊功を立てゝ其威望を增し、帝の信任を買はんと欲し童貫等を遣はし、西邊の地を圖らしむ、童貫吐蕃を擊ちて河湟の地を復せしより更に遼をも圖らんと欲し遼の國情を偵る。燕人馬植遼に怨あり、宋金連合して遼を滅すべきを云ふ、貫喜びて之を伴ひ還り、之を帝に奏す。帝馬植を金に遣はし、宋金同時に遼を夾擊するの約を結び、金は遼の中京を取り、宋は南京を取り事成るの日、宋は南京附近の諸州を收め、金は宋の遼に贈りし歲幣を受けんことを約せり。是に於て金の太祖は兵を進めて、遼の上京中京に勝ち、天祚帝を追ひて、又西京を陷る、宋の童貫等兵を率ゐて南京を攻む、遼將迎へ戰ひて屢、之を破る、金は宋の出陣其期を失したるを責め、前約を履むことを拒み、たゞ南京と山前の六州を與へんといへり。太祖宋兵の南京を下す能はざる見自から之に向ひ城初めて陷る。是に於て又南京をも與へざらんとす。宋は遂に既定の歲幣の外每歲錢百万緡及び一時糧二十万を贈りて、僅に南京と其附近の六州を得たり。

天祚帝の遁走

遼の天祚帝は遁れて、西夏に投ぜんとす。金は遼夏の連

遼亡ぶ

合せんことを恐れ、夏に地を與へて、遼主を執送せしむ。遼主は更に北に走りて黨項に投ぜんとせしが途にて金兵に捕はる。（西紀一一二二年）

耶律大石

西遼の建國　耶律大石は遼主の一族なり、遼の亡ぶる時餘衆を率ゐて西に走り、興復を謀る、別失八里（今甘肅廸化州）の回鶻先づ迎へ降り、此より進むに從ひ、軍勢彌〻盛となり、別喇薩軍に至る、其王國を棄てゝ遁る。大石因りて都を虎思斡耳朶に定め、國を西遼一に黑契丹と號し、自ら天祐帝と稱す。之を西遼の德宗となす、德宗宋國の回復を圖らんとし、大兵を率ゐて東征せしが、志を果さずして死し、子孫中央亞細亞地方に君臨す。

德宗の子孫

第四節　宋金の交渉

金宋に迫る　遼既に滅び、宋は直に金と境を接す、宋たる者戒愼せざる可からず、然るに宋は或は遼の遺臣を招き或は金の叛將を納れ、且つ約せる二十万石を輸せざるを以て、遼は怒りて南伐の策を決し、宗翰宗望將となり、兩道より并び進み、太原、燕京（今の北京）を陷れて深く宋地に入る。宋主急に詔を下して已が罪を責め、四方勤王の師を徵し、位を其子欽宗に讓る。欽宗立ちて、蔡京童貫

遼燕京を陷る

蔡、童誅せらる

李綱

宋再び金と和す

を誅し且つ使を金に遣はし、和を請ふ。金將宗望聽かず、益、進みて遂に汴京を圍む、欽宗即ち出でゝ南に奔らんとす、李綱固く諫め自ら諸將を督して汴京を守りて奮戰す。然れども朝臣皆鬪志なく切に和を主張す、帝再び使を金營に送り、金五百萬兩、銀五千萬兩、牛馬萬頭を輸し、中山、太原、河間の三鎭を割き、金帝を尊びて伯父となし、宰相及親王を質と爲すことを約し、漸く金人を退かしむ。

宋の南渡　宋は此際三鎭に詔して固く守らしめ、且つ遼の遺族金にある者に書を遣りて內應を勸めしかば

欽宗徽宗虜となる

高宗

南渡

太宗大に怒り再び南侵して汴京を圍む、宋の朝臣尙和戰の可否を論じて、戰備を講ぜざりしかば、城遂に陷り金人欽宗徽宗及后妃を執へ、金帛珍寶を悉くして還る。此時欽宗の弟康王搆は兵を率ゐて相州に在り。將に趨き救はんとす及ばず、此に於て迎へられて位に即く。高宗是なり、帝立ちて李綱を任用し、銳意軍備を講し、恢復を圖る。幾くもなく黃潛善を寵用し其言に從ひ金を避けて都を南揚州（江蘇省揚州府）に移す。（西紀一一二七年）揚州の地南にあるを以て此より以後の宋を史に呼びて南宋といへり。

劉豫
岳飛
韓世忠

金南宋に迫る　金の太宗宋の南渡するを聞き三道より兵を進め、諸方を攻略して揚州に迫る。高宗杭州に遁れ、次で溫州に移り、韓世忠張浚等を遣はし敵を拒がしむ。金大に之を破る。是より先き金主は漢族の歸服せざるを恐れ、宋の降臣劉豫を汴に立てゝ齊帝となし、河南陝西の地に封ず。齊金と兵を合せて屢宋を侵かす、岳飛韓世忠等よく之を江に防ぐ。偶太宗死して從孫熙宗嗣ぎ、有力の臣宗翰黜けられ、齊帝劉豫は其立つる所なるを以て亦廢せらる。是よりさき高宗屢使を遣はし、和を請ひしも宗翰拒みて許さゞりしが、此に至り宗翰の反

撻懶
秦檜

金宋和す

熙宗

廸古乃

對黨なる撻懶は太宗の從弟にして、宗翰に代りて權を取り、宋相秦檜と舊知なるを以て共に相謀りて兩國の和を議し、淮水大散關を兩國の界とし、宋は金の封册を受け、歲貢銀絹各二十五萬を納れ、金は徽宗の梓宮及章太后を宋に歸へすを約す。然るに宋に於ては學者軍人多くは之を喜ばず、秦檜即ち岳飛を殺し、李綱張浚韓世忠等を黜け、主戰者の口を塞ぐ。

講和後の金と宋　金の熙宗即位の初めは良宰の政を輔くるありて、富國强兵を致せしも、晩年酒に耽り屢暴虐の行あり。從弟廸古乃之を弑して位を簒ふ。廸古乃天

世宗

孝宗

下を一統するの志あり。都を汴に移し、南下せんとして、江に迫る。國人尋で之を殺し、廸古乃の從弟烏祿衆望を負ひて位に即く、世宗之なり、再び宋と和を講じ、前に約せる君臣の關係を改めて、叔姪の禮とし、封冊を廢し、歲貢を減ず。世宗賢明にして、學を講じ、大學を建て經史を女眞文字に譯せしめ、且つ當時國風漸く奢侈文弱に流るゝを患ひて、國人の漢土の風を習ふを禁じ、金中興の英主と稱せられ、國の盛大なる亦此時を以て最とす、宋は孝宗高宋に嗣ぎて位に上り、亦賢明なり、金に報ゆるの志あれども、北方の隆運に際し乘ずべき釁なし。是

金宋間の無事

が爲め兩國平和にして事無きこと三十餘年、民よりて暫く休息を得たり。

宋韓侂胄の專權　宋の孝宗位を太子に禪る光宗之なり、光宗心疾あり。在位五年、韓侂胄大后と謀り光宗の子寧宗を立つ、侂胄外戚にして且つ定策の功を恃み、宰相汝愚を逐ひ其推薦にかゝる大儒朱熹を黜け、自から政を專らにし、驕恣を極む。

金章宗

宋、金を伐て敗北す

金は世宗死して孫章宗嗣ぎ、初めは政清明と稱せられしが既にして佞倖事を用ゐ、紀綱修まらず。北方に新興せる蒙古の爲めに連年兵を受け、國勢日に衰ふ。侂胄此

宋金復和す

合不勒

機に乘じ、征して以て益威權を得んとし、遂に盟に反きて金を伐つ。宋軍却て大敗し、荆襄兩淮の諸郡金に陷れらる。寧宗の后揚氏禮部侍郎史彌遠に命じ侂冑を殺し其黨與を流に處す。是に於て宋金の和復成り、叔姪を改めて伯姪とし、歲幣を三十萬に增し、犒軍銀三百萬兩を金に贈る（西紀一二七〇年）

第五節　金宋の滅亡

蒙古の興起　蒙古はもと室韋の一部にして、斡難、怯魯連二河の水源に住し、世々遼金に羈屬せられしが、部長

也速該

鐵木眞

大陽罕

合不勒の時漸く勢を得、孫也速該嗣立するに及び、頻に近傍の諸部を併せ轉、强大となる。也速該の子は實に鐵木眞なり、歲十三にして父の後を繼ぐ。家臣其幼なるを侮り叛き去る者多し。鐵木眞屈せず。先づ金と合して嘗て己の父を殺せし塔々兒部を討じて其讎を報ひ諸部を糾合して勢次第に强大となる。遂に隣國の强敵乃滿王大陽罕を逆へ、伐ちて之を斃し、斡難河上に諸部の君長を會して大汗の位に即き、成吉思汗と號す。時に年五十二なり。（西紀一二〇六年）

蒙古夏を伐つ　成吉思汗既に四隣を平らげ、更に進み

西夏降る

て南侵せんと欲して先づ西夏を伐つ。西夏時に内亂あり、防ぐ能はずして出で降る。是に於て天山附近より伊梨河流域一帶の地悉く蒙古の有に歸す。

宣宗

蒙古金を伐つ　成吉思汗は是に於て其四子と共に全力を擧げて金を伐つ。時に金主章宗既に死し其叔父永濟位に在りしが、柔弱にして將士服せず。西京陷り次で叛者の手に斃る。章宗の庶兄宣宗嗣ぎて立ちしが、蒙古は既に諸州を蹂躪して、燕京に逼りしかば、皇族の女と金帛を納れて和を請へり。然れども燕京に安ずる能はざるを以て、都を汴京に遷せしかば、成吉思汗は其心を

黄河以北蒙古に歸す

疑ひ復南して燕京を陷る、かくして黄河以北の地は全く蒙古の有となれり。

直魯古

西遼の滅亡　西遼は既に述べし如く、初めは甚だ盛大なりしが、德宗の孫、直魯古の時に及び、國勢振はず。其地分裂して畏兀兒、花剌子模、トランスオナシアナ等皆獨立す。

屈出律

成吉思汗の乃滿を破るや、乃滿王の子屈出律は走りて西遼に投じ、遂に直魯古の位を奪ひて自立す。成吉思汗人を遣はして之を攻め、遂に屈出律を擒にして西遼を滅す。

花剌子模の滅亡　此よりさき花剌子模は勢盛大にし

ムハメッド

哲伯

速不臺

て其王ムハメッドは撒麻耳干に都し東シール河より西裏海の西南端に至る地を領せり、成吉思汗之に書を贈りしが其使者殺されしを以て親征せんとし、四子及哲伯、速不臺の二將と大軍を率ひ、西に向ひて諸方を蹂躙しムハメッドは裏海の一小島に遁れて死す。其子兵を起して恢復を圖りしも、直に破れて印度に入る。二將は、成吉思汗の命を受け、裏海の西邊に沿ひて北進し、今の露西亞の南部にある諸族を征服して歸る。

金宋を侵す

金宋相攻む　蒙古西征の間金は北邊事少きを以て兵を出して宋の西北境を侵す、宋西夏と連合して之に當る。是より宋金の間屢戰を交へ、兩國次第に困弊せり。

金宋の困弊

西夏及金の滅亡　既にして、成吉思汗西征より還り來り、西夏を伐つ、王德旺憂死し、王の從弟李睍遂に國を擧げて出で降る、西夏國を立てゝより百九十年にして滅ぶ。

西夏滅ぶ

成吉思汗死す

成吉思汗は西夏を滅ぼせし年、更に金を侵さんとせしが、六盤山（甘肅省にあり）に至りて死し、子窩濶台立つ。太宗の遺志を繼ぎて金を伐たんとし、弟拖雷と兵を分ちて二道より汴京に逼る。金の哀宗蔡州に奔る、蒙古使を宋に遣はして金を夾擊せんことを勸む、時に宋は理宗位に在

蒙古太宗

宋理宗

孟珙
金滅ぶ

り孟珙をやり、蒙古軍と連合して蔡州を陷れ金を滅す。金九世百十七年にして亡ぶ。西紀一二三四年

潤端

蒙古と宋の戰端　宋は蒙古の金に事あるに乘じ、中原を恢復せんと欲し、急に兵を發して汴、京、洛陽に入り蒙古の守兵を逐ふ、大宗宋の其盟に背くを怒り、子潤端に命じ宋を伐たしむ、宋將孟珙等之を禦ぎしも勝たず、邊境次第に蠶食せらる。

大遼

蒙古と高麗との關係　此時に當り遼の遺族等遼東に據り國を大遼と號し、高麗を侵す。時に高麗は明宗の孫高宗位に在り。權臣政を縱にし國民服せず。大遼の兵を

歐洲を震動す

受けて北邊悉く陷落す。會、蒙古の一部將來るあり、高麗を助けて大遼を滅す。既にして高麗蒙古の使者を害せしかば、太宗の怒に遇ひ其兵を受けて京城陷る、高宗江華島に遁れしが後王子を質として降を請ふ。

拔都の西征　金滅ぶるの翌年太祖の長子朮赤の子拔都、太宗の命を受け貴由、速不台を率ゐて西征の途に上る。先づ不里阿里を破り次で烈也贊を屠り、莫斯科、ウラジミール等を陷れ、更に軍を分ちて波蘭を破り、匈加利を征し、別に一隊を派して墺多利のノイスタットに至らしむ。歐洲諸國大に震駭し、羅馬法皇は檄を飛ばして十

金黨汗
白黨汗
憲宗
イスマイル
カリフ

字軍を起さんとす。會太宗の訃至り拔都兵を還へし、ヴォルガ河の下流サライに都を立て、欽察國の主となる。西紀一二四三年是を金黨の汗とす。其兄斡耳朶は別に其東方に國を建て、白黨汗と號す。

旭烈兀の西征　太宗の後を其子貴由定宗受けしが幾ならずして死し、大祖の第四子拖雷の子蒙哥立つ。憲宗是なり、其間内亂ありて、力を外に伸すこと能はざりしが、憲宗立ちて弟旭烈兀をして西征せしむ。時に波斯に於ては回教の一派イスマイル教主之に君臨し、クヒスタンに都し、西亞に勢を振ひ、回教の本宗カリフはバグダッ

ハグダッドを屠る
伊蘭王國
忽必烈
交趾を下す

ドに依りて僅に餘命を保つ。旭烈兀クヒスタンに侵入し、教主ロクンエッヂンを下して、之を殺し、次てバグダッドを屠り、アレポー、ダマスクスを下し、進みて埃及を取らんとせしも果さず。轉じてアルメニヤ地方を略し、タブリスに都して伊蘭王國を建てたり。

蒙古の南方經畧　旭烈兀の西征と前後して憲宗の弟忽必烈は四川より雲南に入り、大理國を降し、吐蕃を伐ちて之を定め、更に速不台の子兀良合台をして交趾を下さしむ。

宋の滅亡　憲宗は是に於て大擧して宋を滅さんと欲

鄂州を侵す

蒙古、宋と和す

元賈似道

し、弟阿里不哥をして國都喀喇和林に留守せしめ、自ら將として南に下り、忽必烈と三道より宋の鄂州（湖北省武昌府）を侵す。宋主理宗、賈似道をして之を防がしむ。似道密使を忽必烈に送り、臣と稱し幣を納めて和せんと請ふ。會憲宗死し阿里不哥蒙古の主となるの心あり。忽必烈後顧の患あるを以て和を許るし、軍を收めて北に還り汗の位に上る。世祖是なり。阿里不哥を降し、新に都を燕京に定め、國號を立て、元と云ふ。（西紀一二七年）宋の賈似道は蒙古の去るを以て己の功となし、寵を恃みて權を恣にし政日に亂る。理宗死し度宗位に即くに及び、蒙古の將伯

恭帝

文天祥

張世傑

張弘範

顏、大兵を率ひて南侵し漢陽、鄂州を降し、宋都杭州に逼る。時に度宗死し、恭帝位に在り、賈似道を黜け、勤王の兵を徵す。文天祥、張世傑等兵を起して入衞せしも皆敗れて、帝遂に元に降る。宋の遺臣帝の兄端宗を奉じて福州に據りしが尋で死し、更に其弟昺崖山に立ちしが、元將張弘範等來り寇するに及びて崖山陷り、帝海に沒す。時に西紀一二七九年にして、我嵯峨天皇の弘安二年なり。

第六節　宋代の文化

儒學　漢以來儒を講する者徒に訓詁を事とせしが、宋

周敦頤邵雍

朱熹

陸九淵

に至りて儒學は一大變遷を爲し、初めてやゝ哲學的組織を備ふる至れり。初め仁宗の世に周敦頤邵雍出で、無極大極、皇極經世の說を唱へ程顥程頤之を祖述し、關中の張載と相對して盛名あり。後數十年を經て高宗の朝に朱熹出で以上の學者の諸說を集めて大成す。此に於て濂周氏洛程氏關張氏閩朱氏の四派を生じ、學者各其所見を鬪はす。されど閩派最勢力ありて、政府の科擧も、亦是により、其學天下に普ねく、今に至るまで行はる。朱子と同時に陸九淵象山といふ人あり兄九齡と共に別に一派を立て、朱子の學問を先とするに反し德行を先とし、二派各

新唐書五代史

資治通鑑

文

其說を主張して相爭ふ。

史學　宋にはまた史書の見るべき者多く出づ。新唐書は宗祁歐陽修等の編する所、五代史は薛居正、新五代史は歐陽修の著にかゝる、司馬光の資治通鑑は政治の沿革を見、馬端臨の文獻通考は歷代の制度典章を知るに缺く可からざるものなり。

文藝　宋初の文は見るに足らざれども、歐陽脩出づるに及びて文章の學大に振ひ、其門に名家輩出す。蘇洵、蘇軾、蘇轍、曾鞏、王安石、其秀でたる者なり。此に於てか後世唐宋を以て文章の黃金時代と爲す者あり。

詩

金の文藝

元好問

詩は北宋には梅堯臣、黄庭堅、蘇軾、王安石あり。南宋には范成大陸游ありて其盛なる唐と比すべし。

金に於ては太祖文學の士を厚遇せしより、文學頗る昌にして、其詩文は殆んど北宋に近きものあり。元好問は其巨擘にして金元兩代を通じ第一等の文學者なりといふ。

書畫　宋の畫家には李公麟、徽宗、釋巨然ありて李公麟尤傑出し。書家には太宗黄庭堅ありて後世に稱せらる、蘇軾米芾は書畫共に巧なり。

宗教　佛教は五代の末に至り稍衰微せしが、宋に及び

禪學

道教

元の領域

て、之を奬勵せしかば、再び勢を得、中にも禪學最も盛なり。又佛教の一種喇嘛教も朝廷の崇奉を得て勢力あり。道教は眞宗の時最も盛にして、朝廷之が爲めに宮殿を作り、道階道官を制す。

第七章　元時代

第一節　元初の外征

無比の大帝國　蒙古は成吉思汗より世祖に至る迄、僅かに七十年の間に古來類なき大帝國を建てたり。其領土北亞の北部と南亞の南を除き、亞細亞大陸を横貫し

東西の交通

て歐洲に跨れり。此に於て所在に割據せし幾多の小國悉く滅して、商賈の往來自由となり、西方の天文、數學、砲術は支那に輸入せられ、支那の羅針盤、活版術は西方に傳へらる。

高麗

日元の衝突　是よりさき高麗は權臣威を振ひ、王高宗を廢す。蒙古前に質とせる三子を援け、權臣を滅して王位に即かしむ、元宗之なり。是より高麗全く蒙古の外藩となる。是に於て蒙古の世祖は高麗王を介して我國を招致せんとす。我國は後宇多帝の頃より支那と全く公の交通を絶ち、唯僧侶商賈の私に渡航するあるのみ、且

阿剌罕范文虎

元軍敗北

つ蒙古の書狀無禮なり、故に時の鎌倉執權北條時宗斷然之を退く。世祖怒り兵を遣はして壹岐對馬に寇す。効なし。已にして宋滅ぶるを以て、全力を盡して之に當らんと欲し、阿剌罕范文虎を將とし、高麗の兵を併せ戰艦四千五百、兵十四萬を以て九州に寇す。皇軍振ふて之を禦ぎ、遂に大風起りて蒙古の戰艦悉く覆沒す。（西紀一二八一年）世に之を弘安の役と云ふ。後ち世祖再擧の志ありしも事ありて遂に果さず。

緬甸

緬甸の征服　緬は今の緬甸なり。緬王は當時蒲甘に都し暹國を略し勢を後印度に振ふ。世祖使を以て朝貢を

交趾

占城

爪哇

命ぜしも應ぜざりしかば、將を遣はして之を征し國都を陷る。王即ち歲貢を納れて降を請ふ。

交趾及占城の征服　占城は交趾の南にあり。世祖將を遣はし之を伐たしめ、途を交趾に借らんとす。交趾之を拒む。元將よりて先づ交趾を攻む。偶〻元軍中疫作り大に敗る。再び兵を起して交趾を征し、國都を陷る、次で國王和を請ひ、占城も又來り降る。

南洋諸國　之と同時に世祖は使者を南洋諸國に遣はし、馬八兒（南印度の東岸）蘇木都剌以下の諸國をして入貢せしむ。獨り爪哇從はず。よりて兵三萬をやりて之を擊破る

元威南洋に振ふ

諸長官には蒙古人を任す

蒙古文字

是に於て元の國威南洋に及ぶ。

第二節　元代の治亂

世祖の內治　世祖又意を內政に留め、京師に中書省、樞密院、御史臺等を置き、地方には行中省、行樞密院、御史臺を設け黜陟軍事政務の事を司らしめ、諸長官には必蒙古人を任じ、他人種をば次官以下に任ず。其他支那の舊制を參酌して、諸の制度を定め。又新に蒙古文字を作る。然るに世祖は屢々外國を征伐し又藩王に賜與する所ありしかば國用の缺乏を致し、遂に聚斂の臣を用ひ、漸

諸王を邊疆に封す

海山

く人民の望を失へり。

海都汗の叛亂　初め憲宗の定宗に嗣ぎて位に即くや、察合台、窩濶台、兩家の諸王不平なり。因て憲宗は之を邊疆に封し、大宗の孫海都も亦金山の北に貶せらる。阿里不哥の不軌を圖るや諸王之を助く。阿里不哥降るに及び諸王は海都を蒙古の大汗とし以て世祖に抗す。世祖死して孫成宗立つに及び兄の子海山に命じ之を伐たしむ。海都敗れて死し其子察八兒阿窩臺汗國の主權を執る。數年の後成宗死し、海山武宗嗣ぎ兵を遣はして察八兒を降し西北邊初めて事なきを得たり。されど此時よ

蒙古衰運に赴く

蒙古の相續法

鐵木迭兒

り内亂相繼ぎ、蒙古大汗國は次第に衰運に赴けり。

宗室の亂　蒙古の相續法は必しも父子相及ばず。是を以て繼承の際常に紛爭あり。さきに成宗の死するや皇后は成宗の從弟阿難答を立てんとせしが、武宗は弟八達及右丞相哈剌哈孫の力により位に即くを得たり。八達其後を受け仁宗といひ、鋭意政を執る。武宗の子和世㻋繼ぐべかりしを、丞相、鐵木迭兒帝の意を迎へ之を讒して出して雲南王となし、帝の長子碩德八剌を太子となす。武宗の舊臣等怒りて反を謀り、敗れて逃れ、察合台汗に依る。武宗死して仁宗嗣で立つに及び鐵木迭兒は

鐵失

仁宗の生母に寵ありしかば、大に專横を極め、仁宗の太子英宗立つに及びて愈甚し。帝之を憎み拜住を擧げて政を任ず。拜住鋭意治を圖り鐵木迭兒の黨與を黜く。鐵木迭兒の義子鐵失黨を率ゐて亂を起し、帝及拜住を殺し、成宗の從子也先鐵木兒を迎へ立つ、泰定帝之なり、帝位に即きて悉く鉄失以下の黨を誅す。のち上都に往きて死し太子位に即く天順帝之なり。

先に泰定帝の上都に赴くや燕帖木兒をして留守せしむ。燕帖木兒嘗て先帝武宗に恩あり、竊に其子和世辣を立てんと欲す。泰定帝死し嗣子幼なるに乘じ、兵を遣し

伯顏

政府疲弊

諸民困苦

天順帝を攻めて之を走らし、和世辣の弟圖帖睦爾と謀り和世辣を迎へ立つ。明宗之なり、明宗到りて暴に死す。圖帖睦爾位を嗣ぐ、文宗之なり。燕帖木兒大功あるを以て信任を受け、勢を振ふ。文宗死し明宗の二子寧宗順帝相繼ぎて立つ。燕帖木兒女を納れて順帝の后となし、益、政を專にす。燕帖木兒死するに及び、伯顏代はりて權を執り、燕帖木兒の黨を黜け、竊に異志を懷く。伯顏の義子帝と謀りて之を退け、代りて權を執る。

元の衰弊　かくの如く、元は代々相續の際紛爭を來たし、其間擁立の功を以て權臣政を恣にせしかば、政府は